

# 『大乘四論玄義記』「仏性義」 大意・釈名・体相の訳注研究\*

菅野博史

『大乘四論玄義記』「仏性義」は大意・釈名・体相・広料簡の四章から構成されているが、今回、第一章から第三章までの範囲の訳注を発表する。

## 〔訳注の凡例〕

1. 本章では、『大乘四論玄義記』「仏性義」大意・釈名・体相の部分を『大日本統藏経』所収本を底本として現代語訳する。
2. 本文に記す（43d / 86b）は、43d は『大日本統藏経』1：74 所収本の43丁・左葉・下段を意味する。右葉・上段を a, 右葉・下段を b, 左葉・上段を c, 左葉・下段を d とそれぞれ記す。86b は『大日本統藏経』（新文豊出版公司）74 の86頁下段を意味する。上段は a と記す。
3. 脚注における〔崔〕は、崔鋈植校注『校勘 大乘四論玄義記』（2009年、韓国金剛大学校仏教文化研究所）を意味し、その頁数を記す。
4. 脚注の見出しは、原漢文とする。
5. 出典の表記は、CBETA に基づく。
6. 脚注における『大乘四論玄義記』の引用文の出典は、『大日本統藏経』に基づくが、〔崔〕の頁数も記す。

## 無(43d / 86b) 依無得大乘四論玄義記卷第七

仏性の意義について、四段がある。第一に大意を明らかにし、第二に名を解釈し<sup>1</sup>、第三に体と相を明確にし、第四に詳しく問答を展開して考察する。

第一に大意を明かすとは、興皇[法朗]大師は、「何ものにも実体として依存したり把握したりせず、まったく何ものにも(44a / 87a)住しないことを宗とすると語らなければならない」という<sup>2</sup>。それ故、『大品般若経』第一巻序品の初めには、「不住というあり方によって、般若波羅蜜の中に住す」とある<sup>3</sup>。それ故、関中の僧叡法師の『大品疏』の中には、「奥深い門を開き明らかにするのに、不住を始めとし、無得を終わりとする」とある<sup>4</sup>。それ故、もし少しでも<sup>5</sup>実体として把握することのできるものがあれば、すべて破り捨てる必要がある。なぜかと言えば、もしほんのわずかでも<sup>6</sup>[実体として]留めれば、実体的把握をしないという根本趣旨ではないからである。それ故、『涅槃経』には「仏性とは、有でもなく無でもなく、因でもなく果でもなく、内でもなく外でもなく、常住でもなく断滅でもない」などとある<sup>7</sup>。四句分別やあらゆる否定を超絶している。そうではあるが<sup>8</sup>、またすべての衆生にみな仏性があるということが出来る。また無いということも出来る。有るとも無いともいう<sup>9</sup>。得失の情に焦点を合わせると、二つある。とりもなおさず有所得と無所得である。それ故、『涅槃経』梵行品には、「有所得とは生死の二十五有であり、無所得とは大涅槃と名づける」とある<sup>10</sup>。『〔涅槃〕経』に「有所得とは、生死と名づける」とあるので、仏性はない。「無所得とは、涅槃と名づける」ので、中道仏性があり、それ以外の物はない。ただこれ(中道仏性)を失えば、仏性は生死の二十五有となり、これを得れば、生死の二十五有は仏性となる。それ故、失は理の外にほかならず、得はとりもなおさず理の内である。それ故、一家(三論家)の根本教義においては、顛倒と不顛倒とは少しの<sup>11</sup>区別もないのである。それ故、『涅槃経』如来性品には、

「甘露のようでもあり、また毒薬のようでもある。服して甘露となれば長生きする場合もあるし、服して毒薬となれば生命を傷つけて夭折する場合もある」とある<sup>12</sup>。『仁王経』には、「菩薩がまだ成仏しない時には、菩提は煩惱となる。成仏した時には、煩惱は菩提となる」とある<sup>13</sup>。『中論』涅槃品には、「涅槃の真実の究極と世間の究極とは、ほんのわずかな差別もない」とある<sup>14</sup>。このような多くの〔経論の〕文は、理の内外という意味にほかならない。それ故、理の外の衆生に仏(44b / 87b)性はないという。しかし、この顛倒の衆生には再び理に入り源に還るという意義があるので、仏性があるということもできる。それ故、『涅槃経』には「すべて心有る者は、みな最高の正しい悟りを得る」とある<sup>15</sup>。それ故、『仁王経』受持品には「大王よ。この波若波羅蜜は、諸仏、菩薩、一切衆生の心識の神妙な根本である」とある<sup>16</sup>。もしそうであるならば、源に還って本来清浄であるという意義でないことがあろうか。

問う。五時般若<sup>17</sup>とは、第二時教等の経である。どうしてこれを引用して仏性の意義を証拠立てるのか。

答える。彼れは自分で五時<sup>18</sup>、四時<sup>19</sup>等〔の教判〕を作るが、経論の意ではない。今、経の中の半満教<sup>20</sup>の意によって、これ(仏性の意義)を明確にするのである。

問う。どのような理由で仏性を説くのか。

答える。『大論』には「諸仏は何も理由がないとか、小さな理由で〔般若波羅蜜を〕説くことはない。説くには、きっと理由があつて説く」とある<sup>21</sup>。今、『法華経』に、「〔釈尊は〕重大な事がらのために、世間に出現する。重大な事がらという意味は、仏知見を開き、乃至、衆生に仏知見の道に入らせようとするために説く」とある通りである<sup>22</sup>。今、仏性も同様である。「知見」は、とりもなおさず仏性のことである<sup>23</sup>。

問う。仏性はどのような法であり、仏性と名づけるのか。

答える。〔法朗〕大師は「三世の諸仏はこれを本性とするので、仏性と名づける。とりもなおさず三世十方の諸仏の本源である。十方三世の諸仏はこ

れによって成仏するので、本源という。仏性を悟ることによって、一切衆生をみな成仏させようとするので、仏性を説くのである」という。無差別の中の差別の立場で仏性を説く。蔵公(吉蔵)は八種に展開するので、仏性を説く。

何であるかといえば、第一に、昔の三乗の性に対応させようとするので、仏性を説く。昔の三乗の性とは、菩薩・辟支仏・声聞〔の三乘人〕にはみなこれらの三つの性があることを意味する。これは三蔵教の中の意である。今、このような誤った考えを破ろうとするので、ただ一つの仏性があるだけで、二乗はないと明らかにする。このような理由で、仏性(44c/88a)を説くのである。

第二に、自らが守っている根源を保持することに対応させようとするので、仏性を説くのである。二乗は四智によって完成し<sup>24</sup>、自ら究極であると言うことを明らかにする。自らの立場を守って留まり、もはや進んで仏果を求めない。今、これらの誤った考えを破ろうとするので、「あなたたちはみな仏性があり、例外なく成仏するであろう。どうして真実を明らかにしていない小乗の経の意を守るのか」という。それ故、仏性を説くのである。

第三に、菩提心を生ずる衆生のために、「あなたたちはみな成仏するであろう。仏性がある、もし発心して修行することができれば、必ず成仏することができるであろう。もし仏性がなければ、どうして発心・修行して成仏することができようか。あたかも乳に酪の性質があれば、貯蔵して揺り動かして酪となるけれども、もし酪の性質がなければ、貯蔵して揺り動かしても、結局酪になることができないようなものである」という。今も同様である。衆生にみな仏性がある、発心・修行するならば、成仏することができる。この意味のために仏性を説くのである。

第四に、下劣な衆生のために、仏性を説く。「あなたたちにはみな仏性がある、成仏することができるであろう。下劣の心を生じてはならず、尊くすぐれた心、中心的に導く心を生じるべきである」とある。これらの事がらのために、仏性を説くのである。

第五に、驕慢でおごり高ぶり、他人を低く見る人のために、仏性を説く。

自分で己れは勝れていると言い、他人は卑しく劣っていると言うので、仏性を説いて、「一切衆生にはみな仏性がある、例外なく成仏するであろう」と明かす。仏性に高下はない。どうして尊いとか卑しいとか〔差別〕があるだろうか。

第六に、好んで罪を犯す衆生のために〔仏性を〕説く。あなたは一切衆生と源が同じである。どうして相手を殺すことができようか。つまり、殺害者に対して、仏性を説く。あなたがもし殺すならば、仏を殺すことに等しい<sup>25</sup>。一切衆生にみな仏性がある、成仏するであろうので、仏性を説くのである。

第七に、小乗の人や一闍提は善根を断ち切り、結局のところ成仏する道理はない。『大経』の本がまだ〔中国に〕もたらされない時には、慧嚴・慧観などの法師はみな「一闍提には仏性がない」といったようなものである。このような誤った考えを破ろうとするので、仏性を説くのである。

第八に、無常に閉じ込められて執著して三法印を修行し、きっと有為法は無常であり、一切法は無我であり、ただ涅槃が寂滅すると思ひ込む三修比丘<sup>26</sup>のためである。この執著を破ろうとするので仏性を説き、諸法にどうして我があるとかなんとかの意義があらうかと明らかにする。我を破ろうとするので、一切法は無我であると説くと、共通に誤って考えて、みな無我であるという。無我を破ろうとするので、仏性の我があると説く。とりもなおさず有我によって無我を破るのであり、かえって仏性の真我を認識する。それ故、『涅槃経』には、「空とは生死、不空とは大涅槃である」とある<sup>27</sup>。これらの誤った考えを破ろうとするので、中道仏性の意義を説くのである。

今思うに、大意は前の八種の説を出ないけれども、今、『大経』に、「〔首楞嚴三昧・般若波羅蜜・金剛三昧・師子吼三昧・仏性の〕五名の中で、波若と仏性は、名称の相違である」とあるのに依る<sup>28</sup>。また『大論』に波若の意を説くことに〔依れば〕、仏性を開くのに、十意があるのである<sup>29</sup>。第一に、最終的に菩薩行に至るために説く。第二に、十方の諸仏・諸母のために説く。第三に大小の両乗が相違するために説く。第四に三乗の三性が相違するために説く。第五に二乗は永遠に四智を完成し、もはや進んで尊くすぐれた道を

求めないために説く。第六に、生身・法身の二身の供養を区別するために説く。第七に、二つの極端を破し、中道に留ませようとするために説く。第八に、一闡提は成仏しないということを破ろうとするために説く。第九に、二乗に正法を信じさせようとするために説く。第十に、万行を完成するので、仏性を説くのである。

問う。この顛倒の衆生に仏性があるか。

答える。顛倒の衆生と言う以上、[仏性は]ない。このような解釈は、大いに『地論』・『摂論』の二論と成実学派・毘曇学派の二学派と相違する。かの宗の八識・七識には、真如の性があるからである。『摂論』等を翻訳した崑崙三蔵法師<sup>30</sup>(真諦)は明らかに「真如の性は八識の煩惱の中にあるけれども、煩(45a/89a)悩にも汚染されず、智慧にも浄められない。自らの性が清浄であるからである。浄でもなく、不浄でもない。体に汚染がない以上、智慧によって浄化される必要がない。それ故、浄でないとなづけ。浄でないのでもないとは、虚妄を断ち切って、体がはじめて顕現するので、浄でないのでもないという。自性清浄心にほかならない。かの論(『摂大乘論』)の三種仏性の中の自性住仏性<sup>31</sup>は、凡夫から金[剛]心まで保持される浄識のように、まだ煩惱を離れず、煩惱の中に留まっているのである」と言っている。もしそうであるならば、どうして惑識の中に真如の性があるのではないであろうか。論師真諦は、惑の下に収めることのできる同類のものがあるとしている<sup>32</sup>。ただこの地域の摂論師<sup>33</sup>は三論の義疏の意を盗み見て、自分たちの理論のなかに置いた。軽毛のように不安定な人はこれに信従するが、呉魯(中国)の師の意ではない。その意味するところは、章甫(冠)<sup>34</sup>を、編み髪の人や入れ墨をする人[などの野蛮な人]の頭に置いて載せるようなものである。

問う。この[顛倒の]衆生に仏性がないということについては、『涅槃論』に、「どうして衆生は仏なのか」とある<sup>35</sup>。

答える。まさしくその意味である。もし道に焦点を合わせて明らかするならば、この衆生は結局、実体として捉えられないので、「衆生は仏である」

という。それ故、その『涅槃論』には、「衆生の内にも仏があるのではなく、外にも仏があるのではなく、あることがないのでもなく、ないことがないのでもない」とある<sup>36</sup>。この意味は仮であり、また中でもある<sup>37</sup>。もし顛倒の衆生というならば、どうして「顛倒を」停止することができようか。それ故、仏性がないといい、虚妄のようなものではない。惑の中に真如の性があるとは、この真如は、虚妄等によって汚染することはできないのである。

第二に「仏性の」名を解釈する。法師たちはさまざまに名を解釈している。今ひとまず先に名の付け方は前代の人たちと異なることを明らかにする。

第一にいう。「仏と性はいずれも因の範囲にある名称である。一切衆生に靈妙な悟りの本性があり、成仏しても変化がない。木石等に「悟りの」本性がないのと区別される。そこで、『大経』には、『一切衆生にみな仏性がある』とある<sup>38</sup>と。

第二に龍光法師<sup>39</sup>は、「仏と性は、未来の果の領域にある」という。そうである理由は、仏は悟ることと名づけられ、因にはその「悟ることという」意味はないからである。性は、もともと変化しない。仏は高くそびえている<sup>40</sup>ので、性と呼ばれる。因の範囲は無常であるので、性の意味は確定的ではない。ところで今、因の範囲でも仏性と呼ぶのは、みな果に従って名づけられたものである。「僧綽」論師は彼の師（智藏）の意を採用して、「「仏と性の」果の二種は、必ず心の因によって得られるものであることを示そうとする。また小乗や外部の物、虚妄等を排除するのである」という。この意味については後に検討する。

第三に開善寺智藏法師は、「果の領域は仏であって性ではなく、因の範囲は性であって仏ではない」という。そうである理由は、仏は悟ることに名づけたものであり、常住を根本趣旨とする。因にその「常住という」意味がないので、果はただ仏にだけあてはまる。性とは変化しないことを根本趣旨とする。因の範囲の成仏するという道理は変化することがないので、性という意味である。「仏という」果は「改めて」果を感得したのではなく「もと

もと果であり], それに不都合はない。因は果に到達したものではないので、因はただ性にだけあてはまる。ところで今、果も性と名づけるのは、因に従って名づけられるのである。[性である] 因も仏と呼ばれるのは、果に従って呼ばれるのである。[因と果の] どちらも互いに従う理由は、因果の理が必然として相関関係のあることを示そうとするからである。つまり、昔の教えや木石、虚空等を排除するのである。

第四家、今の大乘の無所得の意義はそうではない<sup>41</sup>。どうして立場を区別し、さまざまな解釈によって、最終的に断見と常見の二心の有所得を離れないということがあろうか。『[涅槃] 経』は自ら、「仏性は有でもなく無でもなく、内でもなく外でもなく、因でもなく果でもない」などと説いている<sup>42</sup>。仏性を究極的立場から論ずると、存在するのでもなく、存在しないのでもなく、何も当てはめる概念はなく、一道清浄であって、存在もなく不存在もない。存在もなく不存在もないけれども、仮設の概念によって存在・不存在を説く。[仏性の] 存在がなければ、因果の自体存在には存しないし、不存在がなければ、くまなく因果の自体存在に存する。天女が舍利弗に、「女身の色相は、今どこに存在するのか」と質問する通りである。舍利弗が、「身体の色相には存在もなく、不存在もない」という。天女が、「すばらしい。存在もなく、不存在もないのは、仏の説くことである」という<sup>43</sup>。もし詳しくいえば、存在・不存在もなく、存在もなく不存在もなく、中仮を備えているのである。それ故、今、仏性について、因でないものを因と説き、果でないものを果と説くので、因にある場合を仏性と名づけ、果にある場合を涅槃と名づける。それ故、仏性・法性・法界・真如等はみな同一の物であって、名称がさまざまに異なるだけである。また仏性・如来性・三宝性とも名づける。それ故、「仏法僧の三宝の性は、無上第一の尊いものである」という<sup>44</sup>。仏性を究極的立場から論ずると、みな非であって、当てはめる概念はない。因果でないけれども、因果の本となることができる。ただ因果のために本となるだけでなく、また一切諸法<sup>45</sup>のために本となるのである。これは仏性<sup>46</sup> そのものを因と名づけるべきでないのは、仏性は因性ではないからである。涅槃そのものを果と名づけ



るべきでないのは、とりもなおさず涅槃は果性ではないからである。それ故、因でないけれども、因の本となる。それ故、仏性は因でないけれども、また二因となる。仏性は果でないけれども、果の本となることができる。それ故、果でないけれども、二果となる<sup>47</sup>。これはとりもなおさず二果・二因であり、因の果、果の因である。非因非果を本とする。本であるので、正因とするのである。用であるので、傍とする。傍は正によることによって名づけられ、正は傍によることによって名づけられる。しかしながら、傍に相對して正とすれば、これはまだ好い正ではない。傍もなく正もなければ、はじめて正と名づける。この正はもはや言葉で表現することができない。正といえ、傍に所属し、体といえ、用に所属する。それ故、仏性は一道清淨無二である。無二であって二である。それ故、因の果と果の因というものは、相對して名づけられるのである。

ただこの相待に横豎の相違があり、三種類の名称の解釈がある。

第一に理を表わして名を解釈する。とりもなおさず豎の方向から論ずる。因は不因という意味であり、果は不果という意味である。仏は不仏という意味であり、性は不性という意味である。名(45d / 90b)そのままの意味であり、意味そのままの名である。これは豎の方向から表わして名を解釈する。故に『居士経』(『維摩経』)には、「五受陰は、空であって何ものも生起させないことをはっきりと理解することは、苦の意味である。不生不滅は、無常の意味である」とある<sup>48</sup>。もともと生滅を無常とするけれども、無生滅を無常の意味とするのは、とりもなおさず理を表わして名を解釈することである。

第二に開發して名を解釈する。仏は法という意味であり、法は仏という意味である。横の方向から明らかにすることである。因は果に相對して名づけられ、果は因に相對して名づけられるようなものである。それ故、因は非因の因であり、果は非果の果である。それ故、仮設の名称によって因果を説く。因を借りて果を説き、果を必要として因を説く。もし因の因とすることのできるものがあるならば、因は自因である。どうして果を必要としようか。果の果とすることのできるものがあるならば、果は自果である。どうして因を

必要としようか。今意味するところは、仮であるので自の意味はなく、他に依存するので、自の体がない。それ故、仮設の名称によって相対する因果は因果でない。相対的な仮設の因果は、因果ではない。仮設の名称、方便、因縁、相対的な言説、相互依拠には、自性がないので法はない。法がなければ、無所有（無実体）である。無所有であれば、相互依拠して説く。一切法は無二、無所有の意味であるので、因は果によって名づけられ、とりもなおさず果を意味とする。果は因によって名づけられ、因を意味する。それ故、『大経』には、「衆生に深く世諦を知らせようとするので第一義を説き、衆生に深く第一義を知らせようとするので世諦を説くのである」とある<sup>49</sup>。名と意味もそのとおりである。これは自他互いに名を解釈して開発するという意味である。

第三に体そのものに即して名を解釈する。仏は覚了という意味である。

今、性を明かすのに、また三種の仕方がある。仏を例にするとわかる。性は不性という意味である。不性は一切法を包含し、みな無性であり、空無所有、清浄である。縁に随う場合には、仮設の名称によって不性を性と説く。縁に随って明かすものは、どんな性を論じようとするのか。仏性を論ずるのに、ただ仮りに仏を性と名づけるだけである。それ故、仏性と名づける。それ故(46a / 91a)、仏性、法界、法性は、ただ一道を論じるだけで、別の法はない。それ故、性は不性という意味であり、不性は性という意味であれば、この不性・性に達する。性を不性とすれば、非性非不性に達する。この性・不性を理解すれば、この人に仏性がある。理解しなければ、仏性はない。それ故、「すべて心ある者には、みな仏性がある」という<sup>50</sup>。どうしてすぐさま衆生等にみな仏性正因があると語ることを理解しないことがあるうか。

次に経に焦点を合わせて五種の仏性を展開する。名を解釈するのに、諸師の説は相違する。開善智蔵法師は、「正はもっぱら不偏の意味であるはずである。衆生の神明は如来の種智と大小の相違があるけれども、同様に思慮する智慧である。性は他を招き寄せるので、正因と名づけ、まさしく仏果を感得する。[正因は]縁因に相対して名づけられるので、傍助という意味では

ない。縁因とは、縁由という意味である。正因はあるけれども、万行を修しなれば、最終的に果を得ることはできない。万善の修行によるので、仏果を得る。正因に相対して縁と名づけられ、また境界とも名づけられる。草木・虚空等のように、仏果を照らし出すことができない。ただ観察する智によって対象とされ、心のために対境となるので、境界と名づけるのである。了因とは、照らし理解するという意味である。万善の類によって仏果を顕わし出すので、了因と名づける。灯<sup>51</sup>火が物を照らすように、その対境が明了であることをたとえるのである。果とは、因に報いるという意味である。果果とは、果から果を生ずることを意味するので、果果と名づけるのである」という。

今思うと、三種の〔解釈の〕意味は前の通りである。〔正因の〕正は遠く離れるという意味である。『華嚴經』性起品には、「正法は、すべての趣・不趣を遠く離れている」とある<sup>52</sup>。『大品經』無生品には、「波若波羅蜜はどのようなものか。答える、「遠く離れるので、般若波羅蜜と名づける」と。『遠く離れるとはどのようなものか』と。『陰界入等、乃至、すべての法の内空・外空等を遠く離れるのである』」とある<sup>53</sup>。〔正因の〕正は中実という意味である<sup>54</sup>。『正觀論』（『中論』）のようなものである。また不偏と解釈される。因とは、本という意味、由という意味である。それ故、『維摩』經には、「無住を本とする」とある<sup>55</sup>。般若は一切法等を生ずることができる<sup>56</sup>。縁因とは、また古くからの名の解釈によって理解されるようなものである<sup>57</sup>。了因とは<sup>58</sup>、不二を理解するという意味である。また普通の解釈によって理解されるようなものである。果と果果もまた類比的な解釈によって理解される。そうであるけれども、その意味はずっと諸師と相違するのである。仏性を究極的立場から論ずると、仏は四句・百非を極めるから仏である。性は正という意味であり、正は実という意味である。〔仏性とは〕正実の性を極めることである。

第三に〔仏性の〕体・相を論じる。仏性の体・相について、前代の師が理解を主張するのに、三家の相違がある。涅槃の宗体は、きっと仏性の意義で

あるはずである。

第一に道生法師は主張する、「未来の存在が仏性の体である」と。[道生]法師の考えは、一切衆生にたとひ仏性がないといっても、当然清浄な悟りを得るべきである<sup>59</sup>。悟る時には、四句分別やあらゆる否定を重ねることを超脱し、三世[という時間の内部]にも収まらないけれども、まだ悟りを得ていない衆生に焦点を合わせ、四句分別やあらゆる否定を重ねることに比較相対すると、未来の果である。

第二に曇無讖<sup>60</sup>法師は主張する、「本有の中道真如が仏性の体である」<sup>61</sup>と。

第三に道生と曇無讖<sup>62</sup>との中間で主張する、「得仏の理が仏性である」<sup>63</sup>と。法瑤<sup>64</sup>法師の義である。

三人の師の根本主張について、末流の主張は同じでない。かいつまんで十の立場がある。

第一に白馬愛法師は道生の義を採用していう、「当果を正因とするならば、当果の意義のない木石を除外する」と。無明の初念がなければそれまでであるが、心があれば、当果の[仏]性がある。それ故、あらゆる行を修めて果を獲得するので、当果を正因の体とする。この師は最終的に『成実論』の趣旨を取って解釈している。道生法師の意は、必ずしもそうではない。法師は凡人でなく、五事によって証知するからである。法師にもこれと同じ説がある<sup>65</sup>。正確にいうと、顕われれば果であり、隠れば因である。ただすべて方向を転じて<sup>66</sup>、因果とするのである。

第二に靈根寺慧令僧正<sup>67</sup>は、法瑤師の義を採用していう、「一切衆生に本来、得仏の理のあることを、正因の体とする」と。つまり、因の中の得仏の理であり、理は常住である。それ故、二つの文を証拠とする。第一に師子吼品に、「仏性とは、十二因縁を仏性と名づける」とある<sup>68</sup>。なぜかという、あらゆる仏は、これを性とすることからである。これは正因の性を明らかにするもので、諸仏はこれを性とするという。それ故、因の中に得仏の理のあることを証知するのである。第二にまた師子吼菩薩が質問していう、「もし一切衆生に仏性があるならば、なぜ修行をするのか」と。仏は答える、「仏と仏性に

は差別がないけれども、多くの衆生はすべてまだ備えていない」<sup>69</sup>と。これはまさしく性はあるけれども、仏がないので、「まだ備えていない」という。また〔仏〕性のない木石等を除外するのである。これは性である<sup>70</sup>。この二人の師の相違は、曇愛<sup>71</sup>は常住<sup>72</sup>の果に焦点を合わせてこれを明らかにし、慧令僧正は因の中の得仏の理が常住であることに焦点を合わせるのである。

第三に靈味小亮法師<sup>73</sup>は、「真俗がともに衆生の真如性の理を成り立たせることが正因の体である」という。なぜかといえば、心がなければそれまでであるが、心があれば、真如性における生があるからである。平正な真如の正因を体とする。苦・無常を俗諦とし、即空を真諦とする。この真俗は、平正な真如において用いるので、真如は二諦の外に越え出ている。もし外物ならば、真如にはかならないけれども、心識ではないので、生じてから断滅するのである。

第四に梁武蕭天子<sup>74</sup>の義である。心に失われない性である真神があることを正因の体とする。すでに身の内にあるので、心性でない木石などの物と相違する。これは、因の中にすでに真神の性があるので、真の仏果を得ることができるという意味である。故に『大経』如来性品の冒頭には、「我とは、とりもなおさず如来蔵という意味である。一切衆生に仏性があるのは、とりもなおさず我という意味である」とある<sup>75</sup>。つまり、木石などと相違するのである。また二諦の外に越え出ている。また小亮と同じ趣旨である。

第五に中寺小安法師<sup>76</sup>は、「心に深く伝わり<sup>77</sup>朽ちない<sup>78</sup>という意味があることを、正因の体とする」という。これは、神識に深く伝わる作用があるという意味である。心に変化があり、特徴が変化して仏に至るようなものである。また性のない<sup>79</sup>木石などを除外するだけである。また二諦を越え出ているのである。

第六に光宅雲法師<sup>80</sup>は、「心に苦を避け楽を求める性の意味があることを、正因の体とする」という。惑に背く性を理解して<sup>81</sup>菩提性に向かうようなものである。また性のない木石などを除外するのである。それ故、『夫人経』(『勝鬘経』)には、「衆生がもし苦を厭わなければ、涅槃を求めない」<sup>82</sup>とある。

意味の解釈に、「この心に生死に背くという<sup>83</sup>性があることを、衆生の善という根本とする。それ故、正因とする。また二諦の外に越え出ている」という。さらにまた、ときに師である亮師の意義を用いて、「心に真如の性があることを、正体とするのである」という。梁武などの三人の師の学説がある。諸師は、「ただ一つの心神があるだけで、それぞれ一義を採用して、三つの真実<sup>84</sup>を分けるのである<sup>85</sup>」という。

第七に河西道朗法師<sup>86</sup>、莊嚴寺僧旻法師<sup>87</sup>、招提寺白瑱公<sup>88</sup>等は、「衆生を正因の体とする」という。なぜかといえば、衆生の作用は心法を統御し、衆生の意味はいろいろな場所に生まれ、心を支配する主を説いて、偉大な覺りを完成させることをいう。偉大な覺りの因の中で、繰り返し生まれて流転し、心が静まりかえるので、衆生を正因という。得仏の根本である。それ故、『大經』師子吼品には、「正因とは、衆生を意味する」<sup>89</sup>とある。また二諦の外に越え出ていると主張するのである。

第八に定林寺僧柔法師<sup>90</sup>の理論である。開善寺智蔵師<sup>91</sup>の採用するものである。共通にいうと、仮・実はいずれも正因である。それ故、『大經』迦葉品には、「六法（色・受・想・行・識と衆生）に即さず、六法を離れず」とある<sup>92</sup>。個別にいうと、心識を正因の体とする。それ故、『大經』師子吼品には、「すべて心のある者は、みな悟りを得る」とある<sup>93</sup>。それ故、法師は、「極悪の一闍提も根本に帰るといふ道理がある。草木のような無生物はこの一生で終わり<sup>94</sup>、最終的に得〔仏〕の道理がない。衆生の心識は、相続して断ぜず、最終的に偉大な聖人となる」という。今、かの〔心〕識がないものに比較するので、衆生に仏性があるというのである。それ故、迦葉品にも、「仏性でないとは、墻壁瓦石のような無生物は、草木などを除外する」とある<sup>95</sup>。これは、心識靈知があれば、悟りという果を感得することができるという意味である。果はともに二諦である。

第九に地論師は、「第八無沒識を、正因の体とする」という。

第十に撰論師は、「第九無垢識を、正因の体とする」という。

それ故、それらの両師は、「凡夫から仏に達するまで、同じく自性清浄心

を正因仏性の体とする」という。それ故、彼は、「自性住仏性、引出仏性、得果仏性である」という<sup>96</sup>。この引出・得果の二つの性については、それらの師たちの理解は同じでない。一説に、三性はいずれも正因性であるという。また一説に、自性住は正因性であり、その他の二つの性はそうではないという。なぜかという、果と果果の二つの性は、得果性、引出性である。とりもなおさず十二因縁によって生ずる法である。了因性、自性住を觀察知覚するのは、非因非果の仏性正因の性である。地論師は、「區別していうと、三種がある。第一に理性、第二に体性、第三に縁起性である」という。隠れる時には理性とし、顕われる時には体性とし、用うる時には縁起性とするのである。地・撰の二論の意義は奥深く同じである。昔の曇無讖<sup>97</sup>の理論である。

今考えるに、これら十師の説は、いずれも自分勝手な心によるものであり、経によって考えたのではない<sup>98</sup>。次のようにいうことができる。『大経』に、「競って瓦礫を投げ、羊角の刀と誤って伝える」とあるとおりである<sup>99</sup>。師子吼の中の呾呾の通りである<sup>100</sup>。それ故、一々これを破る必要がある。

質問する。十家も経を引用し、あなたも経に拠っている。どうしてあなただけが正しく、他は正しくないのか。

答える。この事がらは、世間の娘と婢の二人の子供が父親の家業を争うようなものである。どうして互いに似ているとするのか。さらにまた、今家は南天竺の摩訶衍を学ぶ龍樹の影響を受けている。彼は鬪賓<sup>101</sup>の小乗を学ぶ訶梨跋摩の論（『成実論』）に依っている。さらにまた、地・撰の二論の有得大乘を学ぶ師宗は、すでにはるかに隔たっている。あなたは『成実論』<sup>102</sup>と地・撰の論を学び、私は三論を学んでいる。私は初命の章について論じよう。『十二門論』には、「今、かいつまんで摩訶衍を理解すべきである」とある<sup>103</sup>。『中論』の冒頭にもまた、「摩訶般若波羅蜜の中に説く通りである」とある<sup>104</sup>。あなたは初命の章について論じて、「なぜこの論を作るのか。私は正面から三蔵の中の真実の意義を論じようとする」<sup>105</sup>という。もしそうであるならば、はるかに隔たっている<sup>106</sup>。それ故、『法華経』安樂行品には、「三蔵の学者に近づいてはならない」とある<sup>107</sup>。さらにまた、『大品』遍<sup>108</sup>学品に

は、「十地を戲論とする。乃至、一切は戲論である」とある<sup>109</sup>。それ故、かの学説は、無沒識を惑から解脱する根本とする。金剛心に達して無沒は消滅し、無垢を顕わす。どうして二見の徒であろうか。それ故、『[大品般若] 經』には、「二があるものはすべて有所得である」とある<sup>110</sup>。また冥より覺を生じることでもあり、外道の理論<sup>111</sup>と同じである。なぜかという、無沒無明の上に、修行して十地の理解が生じる。どうして冥より覺<sup>112</sup>を生じるという理論でないであろうか。このため師弟は相違し、教門も相違する。どうして比較することができようか。それ故、『大經』には、「甘露とも名づけ、毒薬とも名づけるのである」とある<sup>113</sup>。今、二<sup>114</sup>種の批判を明らかにするのに、仏性はどうして心や心でないものに関わる<sup>115</sup>であろうか。乃至、八・九識も同様である。それ故、今、心・不心のどちらでもない。このために心・不心はいずれも仏性であると論じることができる。今、もし仏性を明らかにするならば、すべて非でないものはない。『大經』の下の文に、「有でもなく無でもなく、有為でもなく無為でもなく、常でもなく無常でもない。乃至、断でもなく不断でもないのである」とある通りである<sup>116</sup>。このために、仏性は、否定を繰り返しても否定しきれないものであり、肯定をくり返しても肯定しきれないものであり<sup>117</sup>、是(47c / 94a)の非もまた非でなく、非の是もまた是でない。百非の非せざるもの、百是の是せざるものである<sup>118</sup>。横に百非を絶し、豎に四句を絶している。横に百非を絶すとは、前に説く通りである。仏性は有でもなく無でもなく、常でもなく無常でもなく、心でもなく色でもない。このような一切はすべて非である。このようにすべて非であるならば、どうしてただ百非、乃至、百千万の非、乃至、無量の非に限られるだろうか。豎に四句を絶しているとは、仏性は、心でもなく不心でもなく、亦心非心でもなく、非心でもなく非不心でもないという通りである。このような四句はすべて絶している。一切はみな非である。百非、乃至、千万の非である。無量が非である以上、無量の是を招き寄せる。前は百非である以上、乃至、万の非<sup>119</sup>、無量の非である。一切はみな非であるとは、今、是を論じるならば、百是は万の是である。乃至、一切はみな是である。善、あるいは悪、



色、あるいは心など一切はみな仏性である。『大経』の下の文に、「煩惱は仏性であり、色もまた仏性である」<sup>120</sup>と明らかにする通りである。空空を釈して、「是の是と非の是は、空空と名づける」という通りである<sup>121</sup>。非はどちらも非であり、是はどちらも取る。是故是是非是是皆是空空是是非是而是是非是非非非非而非不非也<sup>122</sup>。

第一家・第二家が当果の理と得仏の理を正因の体とすることについて、今、三つの理由によって破る。第一には有<sup>123</sup>無によって批判する。三世を破るようなものである。この二つの理は、有であるのか、無であるのか。理がもし有であって無と相違するならば、理は当然生じるべきである。すでに無と相違するのは、すでに有るからである。現在の理に所属する。もし無<sup>124</sup>ならば、理は無い。さらにまた、過去の理が理であるのか、未来の理が理であるのか、理の時が理であるのか。過去の理を理とするならば、当然過去の生を生とするべきである。過去の生は、当然改めて生ずるはずはない。同様に過去の理を理とすることはできない。もし未来の理（47d / 94b）であるならば、理はない。理の時は、この理は事である。さらにまた、この理は空であるのか、空を離れているのか。もし空であるならば、空には理がなく、空を離れるならば、理がないのである。

第三家は、真俗の平正な真如の性を正因の体とすると、[二諦 [義]]の中で破る通りである。色の性は空である<sup>125</sup>。[無明の]最初の思いが始めて明るくなれば正因である。この正因は始めて生じる。真には初めがある。もしまだ衆生がない時には、また誰れが正因となるのか。もし初めに衆生が真如の上に生じると思うというならば、空の中に万物を生じるようなものである。万物はどうして虚空を体とすることができるだろうか。器の中に物があるようなものである。この師は最もレベルが低い<sup>126</sup>。

第四家は外道の理論に似ている。真神の性を正因の体とするという以上、すでに身の内にあり、木石などと相違する。どうして神我<sup>127</sup>がくまなく<sup>128</sup>二十四法<sup>129</sup>の中にあるのでないであろうか。

第五に小安師は、「つまり心に深く伝わり朽<sup>130</sup>ちない用があることを正因

とするので、真如の性を正因の体とする」という。さらにまた、「招<sup>131</sup>提の理論と同じである」という。

第六に光宅は、「心に真如の性があるので、苦を避け楽を求める作用がある。真性を正因の体とする」という。今、意味は同じであるけれども、第三家、無明の初念が始めてあると、真如の性もまた始めてある。始めてある以上、どうして心が滅するのか。一方、真如の性は心の有為を脱して、常住の性を出ない。もしそうであるならば、心法に關<sup>132</sup>わらない。もしそうならば、どうして正因の体であるのか。さらにまた、「苦を避け楽を求める性」というのもまた開善の氣<sup>133</sup>類である。

第七家の招提寺慧琰等は、「衆生は正因の体である」という。『經』の中ですでに破した。『波若經』に、「もし我の相、衆生の相があるならば、菩薩ではない」<sup>134</sup>と説く通りである。さらにまた、『金光明經』に、「善女は次のように觀察すべきである。どこに人や衆生があるのかと。本性は空寂である。無明があるので、[人や衆生が]存在するのである」<sup>135</sup>という通りである。もしそうであるならば、どうして無明によって衆生を見て<sup>136</sup>正因(48a／95a)仏性とするのでないであろうか。もし衆生を正因の性とするならば、衆生を見ることはとりもなおさず仏性を見ることであろうか。心を制御する中心的存在のようなものは、偉大な覺りを完成することができる<sup>137</sup>。それ故、衆生を正因とするという。得仏の本であるとは、衆生は本来さまざまな所に生ずるので、衆生と名づける。三聚等<sup>138</sup>が成立するので、衆生是因成仮である。因仮が究極に達し、三聚等が成立する。獲得される仏果は、さまざまな所に生ずるのではない。さらにまた、因成仮ではない。因果はたがいに合致しない。どうして正因と名づけることができようか。最終的に助<sup>139</sup>因は正因の体ではないのである。さらにまた、衆生は知と不知とに合致しない。どうして覺知仏を正因とすることができるのか。さらにまた[經]文には、「衆生の仏性は五陰の中に住している。もし五陰を害するならば、殺生と名づける」とある<sup>140</sup>。衆生は殺すことができるので、仏性はそのまま殺すことができるし、断ち切ることができるであろう。衆生が無常である以上、仏性もま

た無常である。さらにまた〔経〕文には、「仏性は陰でもなく、衆生でもない」とある<sup>141</sup>。それ故、仏性は衆生に関わる<sup>142</sup>のではない。どうして衆生を仏性とすることができようか。それ故わかる、仏性は衆生でもなく、衆生でないでもない。このため衆生は仏性ではない。

質問する。もしそうであるならば、河西道朗はどうして衆生は仏性であるというのか。

答える。〔道朗〕法師の意味は、恐らくは『涅槃論』に、「衆生は是れ仏性なり」という通りである<sup>143</sup>。第九・第十の両家が正因を主張するさまは前の諸師と相違して、断見と常見の過失を離れていない。因中有果の過失でもある。秘かな隠れた形でこの理がある。俗に真諦の理の気の過失があるようなものである。また「二諦〔義〕」の中に破す。地・撰の二家においては、妄と真とは同一であるとか、妄と真とは相違するとかいうが、どちらにも過失がある。もし〔妄と真とが〕同一で、妄は真を覆い真を隠れさせることを蔵と名づけるならば、真もまた当然妄を覆うべきである。真は当然常に顕われるべきであることを、法身と名づける。もし妄と真とが相違するならば、それぞれ体に二義がある。それ故、二見に墮落する。また一家において、虚実の二諦がある。仮<sup>144</sup>の上にこれを明かせは、すぐに（48b / 95b）渉る。それ故、『中論』『十二門論』には、「有為は空であるから、無為も空である」とある<sup>145</sup>。それ故、かの地・撰二論の意味は、金〔剛〕心以下は有為であり、無垢識は無為であるということである。それ故、虚と実との二識であるから、破せられるのである。第八家の開善寺智蔵は、心を正因の体とするという定林寺僧柔法師の理論を述べ用いるとは、今、『〔中〕論』の七句によって検査する<sup>146</sup>。心を正因とする場合、〔正因は〕生であるのか不生であるのか。もし生を正因とするならば、『〔中〕論』に生、つまり自生、他生、共生、無因生を破す通りである。三時に生を求めると、已生、未生、生ずる時の生がある。この七句によって生を求めると不可得である。どうしてこの心識を正因仏性とすることができるのか。『大経』師子吼〔品、卷〕第二には、「五陰に焦点を合わせてこれを明らかにする。色も仏性でなく、識も仏性でない。このよう

な五陰はどの一つも仏性ではない」とある<sup>147</sup>。さらにまた、「心は仏性でない。なぜかといえば、心は無常であるからである。仏性は永遠に変化がないからである」とある<sup>148</sup>。さらにまた、『華嚴経』には、「仏性とは、心識によって認識されず、境界でもないのである」とある<sup>149</sup>。さらにまた、『金剛波若経』には、「仏は、諸心はみな心ではないと説く」とある<sup>150</sup>。このような諸経には、いずれも、「心は仏性でない。どうして確定的に心法を正因と説くのか」とある。さらにまた、『涅槃経』には、「六法に即しない。六法は仏性でない以上、六法を離れない」とある<sup>151</sup>。どうして六法は仏性であることを用いることができようか。六法は仏性である以上、どうして六法は即でないのか。六法が即でないのは、また用がないからである。今明らかにする、つまり六法ではない。六法は非である以上、六法を離れない。六法もまた非であるので、即・離はすべて仏性でないのである。今、この十説を観察すると、すべて体の体とすべきものがある。今の所説については、究極的に、この義はない。今時の無所得の意味は、この有所得の十説を求めると、仏性の体相を明らかにすることができる<sup>152</sup>。これを求めると、不可得である以上、どうして(48c/96a)体相とするのかを知らない。それ故、『経』には、「当然諸法を観察すべきである。どこに人、及<sup>153</sup>び衆生はあるのか。本性は空寂である。無明があるので[人と衆生が]あるのである」とある<sup>154</sup>。さらにまた、『大品経』三慧品には、「仏は、私は五眼によってすら衆生を見ないという」とある<sup>155</sup>。どうして菩提は獲得することができようか。そして無目<sup>156</sup>の衆生は、菩提を得ようとする。今、つまり目<sup>157</sup>で見るものを世諦とするけれども、不可得を真諦とする。それ故、彼の明らかするものはすべて二義であるので、正がない。どうして正因とすることができようか。

質問する。前の十師の説はいずれも過失を護るために破せられるとは、今時、この場所の宝惠淵師・祇洹雲公<sup>158</sup>は、真如を正因の性とする。またどのようなようであるか。

答える。一応、かの師の理論的中心を観察記述すると、治城<sup>159</sup>素法師<sup>160</sup>の学説に落ちるのに似ている。並びに莊嚴の義や地論の氣<sup>161</sup>であって正宗

ではない。またかの師は、大乘論の中の因中有果・無果等が破せられることを認識していない。それ故、私心に推測執著して理論を作る。不足及破限<sup>162</sup>。耽羅、刀牛利等の人<sup>163</sup>は、礼楽を受ける対象ではない。

今、大乘によって〔仏性の〕意味を明らかにすると、正しく中道を正因の体とする。それ故、正因仏性は正法である。それ故、『経』には、「正法と正道とは、本来不二である」とある<sup>164</sup>。これまで説かれてきたことは、すべて二の義である。どうしてかといえ、空有、生死涅槃、凡聖等である。すべての法は二でないことはない。『大品経』三慧品には、「二つあるものは、有所得である。二つないものは、無所得である」とある<sup>165</sup>。『大品経』二十二卷遍<sup>166</sup>学品には、「二相があれば、檀波羅蜜、乃至、般若波羅蜜もなく、道もなく、果もなく、乃至、順忍もない。まして色相、乃至、一切種智の相を見るだろうか。もし修道がなければ、どうして須陀洹、乃至、阿羅漢（48d／96b）果、辟支仏道、阿耨多羅三藐三菩提を得て、煩惱、及び習を断ずることができるであろうか」とある<sup>167</sup>。さらにまた、すべての法に二つあるのは、みな有の法である。有の法はそのまま生死の生起することがある。生老病死憂悲苦悩を離れることはできないのである。

質問する。二がないとは、確定的に無所得であるのか。

答える。『大品経』第十一卷照明品には、「もし菩薩がこのように考えるならば、波若波羅蜜である。無所有は、虚空のように、堅固でない。菩薩が般若波羅蜜を遠離することである」とある<sup>168</sup>。もしそうであるならば、心に思うことができるようなものは誤りである。『中論』に、「もし受けるものがあるならば、断見と常見に堕落するのである」とある通りである<sup>169</sup>。『大経』第十五梵行品には、「無所得とは、大乘と名づける。菩薩は諸法に住しないので、大乘と名づけることができる。このために菩薩を無所得と名づけるのである。有所得とは、声聞・辟支仏道と名づける。菩薩は二乗の道を断ずることを求めるので、仏道を得る。このために無所得と名づけるのである」とある<sup>170</sup>。それ故、理論家は、「有所得とは、無道無果であり、無所得とは、有道有果である」という<sup>171</sup>。それ故、もしそうであるならば、この十説の理論的中心

を探究すると、二の義でないことはない。どうして正因仏性であろうか。それ故、十説は究極的には、有無所故<sup>172</sup>。有所得とは、今はすべて無である。それ故、究極的にすべて清浄である。すべての法は浄もまた浄であり、尽もまた尽である。それ故、今、中道を正因の体とする。中道の体は清浄である。そして仏性の体を明らかにするとは、無体を体とする。それ故、『大品経』第十二卷嘆浄品には、「このすべての法の性は、また無性である。この無性は、とりもなおさず性である」とある<sup>173</sup>。不起不滅であるので、仏の無体を体とする。とりもなおさず浄悟を体とする。それ故、中道正法を正因仏性の体とするのである。

質問 (49a / 97a) する。さらにどんな文証があるか。

答える。経文はとても多い。『大経』第二卷末にも仏性を明らかにしている。瑠璃宝珠<sup>174</sup>が正しく中道をたとえているように、仏性もまた譬喩によって縁果を明らかにすることができる。さらにまた、如来性品もまた譬行を挙げて、中道仏性を明らかにする。仏性は実<sup>175</sup>に隠密でも顕了でもない。迷悟に焦点を合わせて、隠密・顕了を明らかにする。失えば隠れ、得れば顕わになる。また縁正の両性は、傍正によって論じるのである。一体三宝は、中道仏性を明らかにする。三一でないので、三一がある。この二つの意は、仏性を明らかにする。意味はまだ足りないようである<sup>176</sup>。もし広く中道仏性を明らかにするならば、下の文の通りである。『[涅槃]経』に、「明と無明について、愚者は二と思ひ、智者は理解してその無二であることを知る。無二の性は、とりもなおさず実性である。乃至、隠と顕とについて、愚者は二と思ひ、智者は理解してその無二であることを知る。無二の性は、とりもなおさず実性である。三と一について、愚者は二とし、智者は理解してその無二であることを知る。無二の性は、実性にほかならない」という通りである<sup>177</sup>。このように広く中道仏性を明らかにしているのである。さらにまた、迦葉品の文には、「私は迦葉を批判する、『あなたは今、なぜ失意して、このような質問をするのか。私は先に中道を仏性と説かなかったか』と」とある<sup>178</sup>。さらにまた、師子吼の文には、全部で六つの質問がある。最初の質問には、「何

を仏性とするのか。仏は答える。仏性とは、とりもなおさず第一義空である」とある<sup>179</sup>。さらにまた、「何を空というのかとは、空と不空とを見ない。声聞・縁覚は、ただ空ばかりを見て、不空を見ないので、中道を行じない。それ故、仏性を見ない。智者は、空と不空とを見、中道を行ずるので、仏性を見る」とある<sup>180</sup>。下の文に結論づけて、「第一義空はとりもなおさず仏性であり、仏性は中道にほかならない」という<sup>181</sup>。さらにまた、仏は第一問に、「あなたは質問する。どのような意味によって仏性と名づけるのかとは、仏性は阿耨多羅三藐三菩提の中道種（49b / 97b）子を意味する」と答える。下の文に結論づけて、「このような中道を、仏性と名づける」という<sup>183</sup>。さらにまた、下の文には、「仏性とは、内でもなく外でもない」とある<sup>184</sup>。さらにまた、「因でもなく果でもないものを、仏性と名づける。因でもなく果でもないので、永遠に変化がない」とある<sup>185</sup>。その文はととも多く、すべて中道を仏性としているのである。もし前の十家の主張のようであるならば、いずれも破す必要がある。上に説く通りである。今はみな仏性である。つまり、理の仮用について仏性の意義を明らかにする。それ故、『涅槃經』に「正因」というのは、衆生を意味する。これは、衆生は真実には縁因の性であるという意味である。ただ能御・所御に焦点を合わせて明らかにするだけである。衆生は能御であるので、正因と名づける。偏に対して中を明らかにするようなものである。真実には正中でない。非偏非中であるものを、はじめて正中と名づける。非耶<sup>186</sup>非正であるものが、はじめて正中である。今、衆生も同様である。能御であるので、正因と名づける。真実を論じると、能御でもなく所御でもないものを、はじめて正因の性と名づける。また次のようにいうこともできる。『涅槃論』の「衆生は仏である」という通りである<sup>187</sup>。さらにまた、『涅槃經』に「すべて心のある者は、みな当然成仏するであろう」とある<sup>188</sup>のは、また理の仮用によって明らかにする。このために仮中もまた仏性である。正因の体にはほかならない。中仮もまた仏性である。正因の用にはほかならない。今、悟りを体とするので、仏を覚と名づける。これに対して法を明らかにすることを、不覚と呼ぶ。究極的に仏性を論じると、覚でもなく

不覚でもないものを、はじめて正法の体と名づける。それ故、一家は、「ただ法性を指して三宝とする。不覚に相對して覺といい、覺に相對して不覺という。不覺に相對して覺というのは、覺を仏宝とする。覺に相對して不覺というのは、不覺を法宝とする。覺と不覺は不二であるので、同じく<sup>189</sup>僧宝である」という。もしそうであるならば、どうして一円真体があって三と説くことができるのか。この一はまた一ではないので、一がない。この三はまた三でないで、三がない。それ故、強いて三一・一三、無(49c/98a)三・無一と名づける。覺を仏とするので、仏はとりもなおさず如来性であるという。前に尽淨という。淨もまた淨である。無所覺の体もまた無無である<sup>190</sup>。みな覺と名づけるのは、またこの無所覺を覺することを、仏性と名づける。それ故、まだこの覺がなければ、仏性がない。それ故、「すべて心のある者には、仏性がある」という。性を有とするのである。さらにまた、木石外物等は本来清淨であり、病であったためしはないので、仏性があるとはいわない。ただ心だけある<sup>191</sup>者は、また偏に対して中を明らかにする通りである。心だけが顛倒妄情を生起させることができ、ほしいままに心という。この心はかえって不二清淨を悟ることができる。それ故、心ある者に就くならば、菩提を得る。悟りに達する時には、内外の相はない。それ故、仏性というのは、非内非外、非因非果等であって、すべて淨を得るのである。さらにまた、外道、木石等に情があるとすることを破すということができる。それ故、情に焦点を合わせて明らかにする。すべて心ある者である。さらにまた、一闡提不成仏を排斥論破する<sup>192</sup>。それ故、すべて心ある者には仏性がある、覺りを完成するという。石壁瓦礫等ではないのである。それ故、自ら心を悟るように勧める。もし心は本来清淨であることを悟るならば、仏性と名づける。その時、柱<sup>193</sup>木等の法の區別はあったためしはない。ただ知・不知に焦点を合わせて、差別を明らかにする。それ故、『菩薩頭陀經』には、「照明菩薩は、心王菩薩に、『煩惱の性の内を觀察して、衆生を救済する。その特徴は理解できる。外法はどうか』と質問する。心王菩薩は、『内外の法は相違しない。もはや相違しないけれども、先に内の一つの煩惱の淨、多数の法の淨を觀察しなければ



ならない。なぜそうであるのか。内は外の根、衆生は聖の源であるからである。この妙法を得て、法によって衆生を救済する。衆生は尽きないので、仏身も尽きない。衆生は限界がないので、仏身も限界がない。衆生の性は、とりもなおさず虚空である。虚空はとりもなおさず仏性である』と答える」とある<sup>194</sup>。それ故、一家はこのことを明らかにする。仏性の体(49d / 98b)は、悟りを体とする。この悟りは、すべてがみな非であることを悟って、観察理解する心は、とりもなおさず内法であることを悟る。もしそうであるならば、どうして仏性は非内非外であるといえるのかというのは、観解は内である。此と相対的な彼は彼ではない<sup>195</sup>。それ故、内法でなく、また外法でない。それ故、悟る時には、内外・生死涅槃・凡聖・有無・解惑の二法を見ない。それ故、菩薩は般若を行ずる時、すべてはみな行でない。それ故、心・心数の法が行じないことを、波若を行ずるとする。波若はとりもなおさず仏性である。それ故、仏性・法性・法界・如如は、また正道である。さらに二つの区別はないのである。

【注】

\* 筆者はこれまで『大乘四論玄義記』「仏性義」について、下記の数篇の研究論文を発表してきた。それらの研究の裏付けとして、『大乘四論玄義記』「仏性義」の一部の訳注を今回発表する。なお、本研究は、2013年度JSPS科研費「基礎研究(C)23520069」の助成を受けたものである。

- (1) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第一大意」の分析(『創価大学人文論集』24, 2012.3, pp. 47-71)
- (2) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析(『印度学仏教学研究』61-1, 2012.12, pp. 471-464L)
- (3) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」について(『創価大学人文論集』25, 2013.3, pp. 51-69)
- (4) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第三体相」の分析(『印度学仏教学研究』62-1, 2013.12, pp. 480-472L)
- (5) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第三体相」の分析について(『創価大学人文論集』26, 2014.3, pp. 13-39)

1 論釈名 奇妙な表現である。該当箇所には、「第二釈名。」(『大日本統藏経』1:74,

p. 45, a15. [崔] p. 343) とあり、『大乘四論玄義記』巻第二に、「金剛心義，有四重。第一明大意，第二積名，第三出体，第四科（料の誤り）簡。」(p. 15, c1. [崔] p. 321) とあるように、「積名」とあるのが妥当である。ただし、『四論玄義』巻第九にも、「二智義有四重。第一大意，第二論積名，第三出体，第四辨料簡。」(p. 68, c3-4. [崔] p. 431) とある。また，巻第五には、「二諦義有十重。第一明大意，第二明積名，第三論立名，第四明有無，第五辨觀行，第六論相即，第七明体相，第八辨絶名，第九明撰法，第十明同異。」(p. 18, d3-5. [崔] p. 171) とあるように、「明積名」が見られる。目的語をすべて二文字として統一し，その上に動詞を置いた形になっているが，本来は「釈」が動詞で「名」が目的語であるので，奇妙な表現である。

- 2 興皇大師云必須語無依無得一無所住為宗 法朗の引用文にある二字の欠字は「一無」と推定される。というのは，吉蔵『金剛般若疏』巻第一において，「經宗」について論ずる中に，「問。山門解釈与他為同為異。答。若求由来，衆解若得，可問与今義同異，求竟不可得，將誰同異耶。能如此，不同不異，不自不他，無依無得，一無所住，即是般若之玄宗也。作上解，有所依住，皆非般若宗也。」(T33, no. 1699, p. 88, a28-b4) とあるからである。本書の書名の一部ともなっている「無依無得」が法朗の発言に見られることは注目値する。なお，引用文に出る「山門」は，吉蔵にも『大乘四論玄義記』にも出る言葉であるが，僧詮，僧朗，法朗と続く撰山三論宗の系譜全体を指した言葉のように思われる。吉蔵『大品經義疏』巻第一，「然山門已來道義不作章段，唯興皇法師作二諦講，開十重者，此是对開善二諦十重故作。其外並無。後人若作章段者，則非興皇門徒也。」(『大日本統藏經』1:38, p. 9, c12-15) を参照すると，法朗も山門に含まれると推定される。引用文では，講經の際に章段を開かない山門の伝統のなかで，法朗のみは二諦について講義するときに十段落を開いたが，法朗もその他の場合は章段を開かないことを述べている。

ただし，上に引用した吉蔵の『金剛般若疏』や『大品經義疏』巻第一，「問。山門解釈与他為同為異。答。求由来，衆解若得，可門[問の誤り]同異。求其不得。將誰同異耶。能如是，不同不異，不自不他，無依無得，一無所住，即是波若之玄宗。有所依住，皆非波若宗也。」(『大日本統藏經』1:38, p. 22, a13-16) の「無依無得一無所住」に關説する部分には，法朗の名は出ない。なお，伊藤隆寿「四論玄義の仏性説」(『日本印度學仏教研究』21-1, 1972.12) は，「正觀」と推定している。

- 3 大品第一卷序品發初云以不住法住般若波羅蜜中 『大品般若經』巻第一，序品，「菩薩摩訶薩以不住法住般若波羅蜜中，以無所捨法應具足檀那波羅蜜。施者，受者及財物不可得故。」(T08, no. 223, p. 218, c21-24) を参照。底本には五字の欠字があるが，これは，「第一卷序品」と推定される。『四論玄義』の經典引用の出典の表示の仕方の特徴の一つとして，巻数と品名を明示することが挙げられる。たとえば，巻第二に，「大品第三卷勸學品云，不以方便行六波羅蜜」(p. 11, a2. [崔] p. 303) とある通りである。実際にこの引用は，『大品般若經』巻第一，序品，「菩薩摩訶薩以不住法住般若波羅蜜中，以無所捨法，應具足檀那波羅蜜。施者，受者及財物不可得故。」(T08,

- no. 223, p. 218, c21-24) に基づく。
- 4 関中僧叡法師大品疏中云啟彰玄門以不住為始以無得為終 僧叡『大品義疏序』（『出三藏記集』卷第八所収）、「故啟彰玄門，以不住為始。妙帰三慧，以無得為終。」（T55, no. 2145, p. 53, a8-9）を参照。
- 5 一毫 底本の「一豪」を改める。
- 6 一微毫 底本の「一微豪」を改める。
- 7 大經云仏性者非有非無非因非果非内非外非常非断等 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「仏性者，亦色非色非色非非色，亦相非相非相非非相，亦一非一非一非非一，非常非断非非常非非断，亦有亦無非有非無，亦尽非尽非尽非非尽，亦因亦果非因非果，亦義非義非義非非義，亦字非字非字非非字。」（T12, no. 375, p. 770, b20-25）を参照。
- 8 雖然而 底本の「雖然爾」を改める。
- 9 言有之與無 底本の「言有之與無」を「言有之與無」に改める。底本の頭注を参照。
- 10 大梵行品云有所得者生死二十五有無所得者名大涅槃也 『南本涅槃經』卷第十五，梵行品，「有所得者，名二十五有。菩薩永断二十五有，得大涅槃。是故菩薩名無所得。」（T12, no. 375, p. 706, c14-16）を参照。
- 11 毫末 底本の「豪末」を改める。
- 12 大經如來性品云猶如甘露亦如毒藥或有服為甘露長生或有服毒藥傷命而早夭 『南本涅槃經』卷第八，如來性品，「或有服甘露 傷命而早夭 或復服甘露 壽命得長存 或有服毒生 有緣服毒死」（T12, no. 375, p. 650, a3-5）を参照。
- 13 仁王經云菩薩未成仏時菩提為煩惱成仏已時煩惱為菩提 『仁王般若經』卷第一，二諦品，「菩薩未成仏時，以菩提為煩惱。菩薩成仏時，以煩惱為菩提。」（T08, no. 245, p. 829, b5-6）を参照。
- 14 中論涅槃品云涅槃實際與世間際無毫釐差別 『中論』卷第四，觀涅槃品，「涅槃之實際 及与世間際 如是二際者 無毫釐差別」（T30, no. 1564, p. 36, a10-11）を参照。「毫釐」は、底本の「豪釐」を改める。
- 15 經云凡有心者皆得阿耨多羅三藐三菩提也 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「凡有心者，定當得成阿耨多羅三藐三菩提。」（T12, no.375, p. 769, a20-21）を参照。
- 16 仁王經受持品云大王是波若波羅蜜是諸仏菩薩一切衆生心識之神本也 『仁王般若經』卷第二，受持品，「大王。是般若波羅蜜，是諸仏菩薩一切衆生心識之神本也。」（T08, no. 245, p. 832, c23-24）を参照。
- 17 五時般若 『摩訶般若波羅蜜經』，『金剛般若經』，『天王問般若經』，『光讚般若經』，『仁王般若經』を指す。吉藏『金剛般若疏』卷第一，「次明五時般若者，出仁王經。初云釈迦入大寂定來相謂言，大覺世尊前已為我等大衆二十九年，說摩訶般若波羅蜜，金剛般若，天王問波若，光讚波若。今復放光斯作何事。既列四種於前，第五最後説仁王護国般若。又大悲比丘尼本願經末記。或在仁王末記云，五時波若者，是仏三十年中通化三乘人也。第一仏在王舍城説大品般若。小品從中出。第二仏在舍衛祇洹精

- 舍説金剛波若。本有八卷。淮南零落，唯有格量功德一品。別為一卷。存其本名，亦云金剛。第三仏在祇洹説天王問波若。大本不來漢地。此土唯有須真天子問波若七卷。法才王子問波若三卷，四天王問波若一卷，竝出其中。第四仏在王舍城説光讚般若。成具道行広淨。此三部從光讚中出。第五仏在王舍城説護國波若。」(T33, no. 1699, p. 86, b17-c3) を参照。また、吉藏『大品經義疏』卷第一にも、「第四五時波若者，出仁王經。初云，釈迦牟尼入大寂定衆相謂，仏已為我等二十九年，説摩訶波若，金剛波若，天王問波若，光讚波若。今復放光斯作何事。既列四種於前，第五説最後仁王波若，故有五味般若也。」(『大日本統藏經』1:38, p. 21, c7-11) と、類似の文が見られる。
- 18 五時 道場寺慧観の頓漸五時教判が有名である。たとえば、『三論玄義』，「宋道場寺沙門慧観仍製經序。略判仏教，凡有二科。一者頓教。即華嚴之流。但為菩薩具足顯理。二者始從鹿苑終竟鷲林，自淺至深，謂之漸教。於漸教内開為五時。一者三乘別教。為声聞人説於四諦，為辟支仏演説十二因縁，為大乘人明於六度。行因各別，得果不同，謂三乘別教。二者般若通化三機，謂三乘通教。三者淨名思益讚揚菩薩，抑挫声聞，謂抑揚教。四者法華會彼三乘，同歸一極，謂同歸教。五者涅槃名常住教。」(T45, no. 1852, p. 5, b4-14) を参照。
- 19 四時 四時教判は、『法華玄義』卷第十，「就漸更判四時教。即莊嚴受師所用。三時不異前。更於無相後常住之前，指法華會三歸一，万善悉向菩提，名同歸教也。」(T33, no. 1716, p. 801, b1-3) によれば，有相教・無相教・常住教の三時教（この引用文の直前に説明がある）の無相教と常住教の間に同歸教を挿入したものである。
- 20 半滿教 菩提流支の半滿二教判を指す。たとえば、『法華玄義』卷第十上，「五者菩提流支明半滿教。十二年前皆是半字教，十二年後皆是滿字教。」(T33, no. 1716, p. 801, b10-11)，『勝鬘寶窟』卷第一，「從菩提留支度後至於即世，大分仏教，為半滿兩宗。亦云声聞菩薩二藏。」(T37, no. 1744, p. 6, a15-16) を参照。
- 21 大論云諸仏不以無因縁及小因縁而説説必有因縁説 『大智度論』卷第一，「問曰。仏以何因縁故，説摩訶般若波羅蜜經。諸仏法不以無事及小因縁而自發言。」(T25, no. 1509, p. 57, c23-24) を参照。
- 22 如法華經云為大事因縁故出現於世大事者所謂開仏知見乃至欲令衆生入仏知見道故説 『法華經』方便品，「諸仏世尊唯以一大事因縁故，出現於世。舍利弗。云何名諸仏世尊唯以一大事因縁故，出現於世。諸仏世尊欲令衆生開仏知見，使得清淨故，出現於世。欲示衆生仏之知見故，出現於世。欲令衆生悟仏知見故，出現於世。欲令衆生入仏知見道故，出現於世。舍利弗。是為諸仏以一大事因縁故，出現於世。」(T09, no. 262, p. 7, a21-28) を参照。
- 23 知見即是仏性也 仏知見を仏性と同一視するのは、珍しいものではない。たとえば、吉藏『法華玄論』卷第一，「仏知見者，謂仏性之異名。衆生本有知見，為煩惱覆故，不清淨。法華教起，為開衆生有仏知見。此即是仏性義。若無仏性者，教何所開耶。」(T34, no. 1720, p. 367, a26-29)，同，卷第五，「問。云何名仏知見。答。此是波若仏性之異名，正法涅槃之別目。」(同前， p. 403, c22-24) などを参照。

- 24 四智究竟 『勝鬘經』一乘章に、「是故阿羅漢辟支仏去涅槃界遠。言阿羅漢辟支仏觀察解脫四智究竟得蘇息處者，亦是如來方便有餘不了義說。」(T12, no. 353, p. 219, c17-20)をあるように、阿羅漢についての描写内容である「我生已尽」「梵行已立」「所作已辦」「不受後有」の四つを指す。吉藏『法華義疏』卷第一、「六就四智門釈者，初兩句釈我生已尽，逮得已利釈梵行已立智，尽諸有結釈不受後有，心得自在釈所作已辦智。」(T34, no. 1721, p. 459, a1-4)を参照。
- 25 便与殺仏等 底本の「便殺仏等」を改めて翻訳した。
- 26 三修比丘 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「空者一切生死，不空者謂大涅槃。乃至無我者即是生死，我者謂大涅槃。」(T12, no. 375, p. 767, c21-23)を参照。また、『大乘玄論』卷第一，「問。若爾者，涅槃經明，空者二十五有，不空者大涅槃。以空為世諦，以妙有不空為第一義諦耶。答。此對三修比丘昔日灰身滅智，為無余涅槃。今日妙有不空。非是判於二諦。」(T45, no. 1853, p. 24, b18-22)を参照。
- 27 經言空者生死不空者大涅槃 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「空者一切生死，不空者謂大涅槃。乃至無我者即是生死，我者謂大涅槃。」(T12, no. 375, p. 767, c21-23)を参照。また、『大乘玄論』卷第一，「問。若爾者，涅槃經明，空者二十五有，不空者大涅槃。以空為世諦，以妙有不空為第一義諦耶。答。此對三修比丘昔日灰身滅智，為無余涅槃。今日妙有不空。非是判於二諦。」(T45, no. 1853, p. 24, b18-22)を参照。
- 28 今依大經云五名中波若与仏性眼目異名 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「首楞嚴三昧者，有五種名。一者首楞嚴三昧，二者般若波羅蜜，三者金剛三昧，四者師子吼三昧，五者仏性。隨其所作，處處得名。」(T12, no. 375, p. 769, b6-9)を参照。
- 29 大論說波若意開仏性有十意也 『大智度論』に示される般若波羅蜜を説く意を参考にして，慧均が改めて仏性を説く意を十種提示するというものである。
- 30 崑崙三藏法師 吉村誠『『四論玄義』に見られる真諦の心識説』(2007年度駒澤大学仏教学会第二回定例研究会 [2008.1.26]の発表資料)は，真諦を指すと推定しており，妥当な見解であると思う。「崑崙」は，南海諸国を指すので，南海を経由して中国に來た真諦と結びつく可能性はあるが，それ以上のことは今は不明である。なお，慧均『弥勒經遊意』卷第一にも，「第九十一劫。劫初有四仏。一名迦羅鳩唼陀仏。亦名參樓孫仏。大論不見翻。崑崙三藏，冠頂亦云帽仏。仏生時如珠有出也。」(T38, no. 1771, p. 265, a10-13)と，「崑崙三藏」の名が出る。ただし，現存する真諦の文献には「帽仏」という訳語はないようである。
- 31 自性住仏性 [崔]によれば，続藏本の「自性住，如從凡夫」に対して，龍谷大学蔵本は「自性住，始從凡夫」に作る。吉村氏は，「如」または「始」を「性」に改め，「自性住性，從凡夫」に修正する(前注30の発表資料)。いずれにしろ，吉村氏も発表資料で引用するように，自性住仏性は，『撰大乘論釈』卷七，釈心入勝相品，「信有三處。一信実有，二信可得，三信有無窮功德。信実有者，信実有自性住仏性。信可得者，信引出仏性。信有無窮功德者，信至果仏性。」(T31, no. 1595, p. 200, c21-24)

- に基づく。また、『四論玄義』巻第七、「第九地論師云、第八無沒識為正因體。第十撰論師云、第九無垢識為正因體。故彼兩師云、從凡至仏、同以自性清淨心為正因仏性體。故彼云、自性住仏性、引出仏性、得果仏性也。」(p. 47, a6-10. [崔] p. 349) を参照。
- 32 或下有可類撰 難解な句である。吉村氏は「撰」、誤字の可能性もある。龍本は『勝』か。その場合、『勝に類すべき有り』と読むか」と注している。もし文字に誤りがなければ、「類撰」は『大方広仏華嚴經隨疏演義鈔』巻第八十八に見られる「余縦不尽、可以類收。」(T36, no. 1736, p. 686, c22) の「類収」と同義で、同類のものを収めるの意かもしれない。ただし、真諦は、惑と、それと異類の真如性ととの密接な関係を説いているので、やはり文意は明らかではない。
- 33 但此間撰論師 この下の記述は、崔鉛植氏が『四論玄義』の百済撰述説を推定する重要な根拠の一つである。崔鉛植「『大乘四論玄義記』と韓国古代仏教思想の再検討」(山口弘江訳、『東アジア仏教研究』8, 2010.5) を参照。
- 34 章甫 儒者の冠の意。
- 35 涅槃論云云何衆生是仏耶 『涅槃論』巻第一、「願仏開微密、広為衆生説。云何微密。身外有仏亦不密、身内有仏亦非密、非有非無亦非密、衆生是仏故微密。云何衆生是仏。衆生非有非無、非非有非非無、是故衆生是仏。」(T26, no. 1527, p. 277, c29-p. 278, a3) を参照。ただし、『四論玄義』巻第八には、「仏」を「仏性」に変えて引用している。「涅槃論云、衆生内有仏性非蜜(「密」の誤り。以下同じ)、外有仏性亦非蜜、亦有亦無非蜜、非非有非非無亦非蜜。衆生是仏是蜜也。」(p. 59, a7-9. [崔] pp. 394-395) を参照。
- 36 彼論云非衆生内有仏亦非外有仏亦非非有非非無也 前注 35 を参照。
- 37 即是仮亦中 『四論玄義』巻第十に「中論云、亦仮亦中也。」(p. 94, b7. [崔] p. 533) とあるように、『四論玄義』には、「亦仮亦中」という表現がしばしば出る。言うまでもなく、『中論』巻第四、観四諦品、「衆因縁生法 我說即是無 亦為是仮名 亦是中道義」(T30, no. 1564, p. 33, b11-12) の引用である。本文の「是仮亦中」も、この『中論』を踏まえた表現であろう。
- 38 大經云一切衆生皆有仏性也 『南本涅槃經』巻第七、邪正品、「一切衆生皆有仏性。」(T12, no. 375, p. 645, b10-11) を参照。
- 39 龍光法師 『統高僧伝』巻第六、「開善藏法師講、遂覺理与言玄、便尽心鑽仰。当夕感夢、往開善寺、採得李子數斛、撮欲噉之、先得枝葉。覺而悟曰、吾正応從學必踐深極矣。尋爾藏公遷化、有龍光寺綽公繼踵伝業、便迴聽焉。」(T50, no. 2060, p. 470, c23-27)、同巻第十六、「龍光僧綽一代英雄、乃肆心仰旨専門受教。学逾一紀、解通三藏。梁建安侯蕭正立、務兼内外、兼弘孔釈、造普明寺、請遠居之、以伸供養之志也。」(T50, no. 2060, p. 556, a14-17) を参照。
- 40 巖然 葛洪『抱樸子』漢過、「含霜履雪、義不苟合。擲道推方、巖然不群。」を参照。
- 41 不然 底本の「不勝」を[崔]によって改める。

- 42 経自説仏性非有非無非内非外非因非果等 底本の「非因非果非等」を底本の頭注によって「非因非果等」に改める。出典は前注7を参照。
- 43 如天女問……無在無不在仏所説也 『維摩經』卷中、觀衆生品、「天問舍利弗，女身色相，今何所在。舍利弗言，女身色相，無在無不在。天曰，一切諸法，亦復如是，無在無不在。夫無在無不在者，仏所説也。」(T14, no. 475, p. 548, c6-9) を参照。
- 44 言仏法僧三宝性無上第一尊 『南本涅槃經』卷第八、如來性品、「仏法三宝性 無上第一尊」(T12, no. 375, p. 650, a23) を参照。
- 45 一切諸法 底本の「一切清法」を底本の頭注によって「一切諸法」に改める。
- 46 仏性 底本の「仏果」は「仏性」の誤りと推定して改める。
- 47 故仏性非因亦為二因 この下に「仏性非果能為果本故非果為二因」があるが、衍文として削除する。
- 48 居士經云五受陰洞達空無所起是苦義不生不滅無常義 『維摩經』卷上、弟子品、「諸法畢竟不生不滅，是無常義。五受陰，洞達空無所起，是苦義。諸法究竟無所有，是空義。於我無我而不二，是無我義。法本不然，今則無滅，是寂滅義。說是法時，彼諸比丘心得解脫。故我不任詣彼問疾。」(T14, no. 475, p. 541, a17-22) を参照。「居士經」という表現は、『金剛般若疏』卷第四、「故居士經云，説法者無説無示。譬如幻士為幻人説法。」(T33, no. 1699, p. 123, c16-17), 『弥勒經遊意』, 「多聞弟子等如居士經説也。」(T38, no. 1771, p. 266, c9), 『大乘玄論』卷第二, 「如居士經云，即生即老即死。寧有應滅而不滅。拳体遂不滅者，復誰滅耶。」(T45, no. 1853, p. 26, b29-c1) に見られる。
- 49 大經云欲令衆生深識世諦故説第一義欲令衆生深識第一義故説世諦也。 『南本涅槃經』卷第三十一、迦葉菩薩品, 「第一義諦説為世諦，説世諦法為第一義諦。」(T12, no. 375, p. 810, c4-5) を参照。
- 50 云凡有心者皆有仏性 『南本涅槃經』卷第二十五、師子吼菩薩品, 「凡有心者，定當得成阿耨多羅三藐三菩提。以是義故，我常宣説一切衆生悉有仏性。」(T12, no. 375, p. 769, a20-22) を参照。
- 51 灯 底本の「燃」を底本の頭注によって「灯」に改める。
- 52 華嚴經性起品云正法遠離一切趣不趣也 『六十卷華嚴經』卷第三十四、宝王如來性起品, 「正法性遠離 一切語言道 一切趣非趣 皆悉寂滅性」(T09, no. 278, p. 615, a3-4) を参照。
- 53 大品經無生品云何等波若波羅蜜答云遠離故名般若波羅蜜何等法遠離遠離陰界入等乃至一切法内空外空等也 『大品般若經』卷第七、無生品, 「如舍利弗所問，何等は般若波羅蜜。遠離，故是名般若波羅蜜。何等法遠離。遠離陰界入，遠離檀那波羅蜜，乃至禪那波羅蜜，遠離内空乃至無法有法空。以是故，遠離名般若波羅蜜。」(T08, no. 223, p. 270, b28-c4) を参照。
- 54 中実 『三論遊意義』, 「所言中者，以実為義。」(T45, no. 1855, p. 119, b16), 『大乘玄論』卷第五, 「今明。釈中亦具三種。如中以何為義。中以不中為義。中以何為義。中以実為義也。」(T45, no. 1853, p. 75, c28-p. 76, a1), 『三論玄義』, 「総論釈義，凡有

- 四種。一依名積義。二就理教積義。三就互相積義。四無方積義也。依名積義者，中以実為義，中以正為義。中以実為義者，如涅槃經本有今無偈云，我昔本無中道実義。是故現在有無量煩惱。」(T45, no. 1852, p. 14, a19-24)などを参照。
- 55 経言無住為本 『維摩經』卷中，觀衆生品，「無住為本。」(T14, no. 475, p. 547, c20)を参照。
- 56 般若能生一切法等也 底本の「般若非」を「崔」によって「般若能」に改める。『大品般若經』卷第二十一，三慧品，「是般若波羅蜜能生一切法，一切樂説辯，一切照明。」(T08, no. 223, p. 376, b9-10)を参照。
- 57 亦得如旧釈名也 底本の「亦得如旧釈名也」を改める。「名」も無い方がリズムは良い。
- 58 了因者 底本の「了因者了因者」を改める。
- 59 淨悟 『中觀論疏』卷第二，「問。云何名此為妙法蓮華。答。以道超四句理絕百非故，名為妙。妙体可軌，目之為法。不為一切諸辺所染，畢竟清淨喻之蓮華。問。以万善為乘，乘名妙法。妙法喻若蓮華。云何乃説空義。答。經云，終歸於空。終歸於空者，雖復説万行，終令得此淨悟。」(T42, no. 1824, p. 30, c24-p. 31, a1), 『大乘玄論』卷第二，「此是大乘摩訶衍淨悟。」(T45, no. 1853, p. 30, b7), 『法華玄論』卷第一，「以此淨悟悟一切衆生，即是教門及徒衆淨也。」(T34, no. 1720, p. 369, b7-8), 『法華義疏』卷第九，「二欲表三根之穢而得淨悟也。」(T34, no. 1721, p. 590, a17-18)などを参照。
- 60 曇無讖 底本の「曇此遠」を，湯用彤『漢魏西晋南北朝仏教史』(北京大學出版社，1997。初版は商務印書館，1938) p. 483によって「曇無讖」に改める。
- 61 本有中道真如為仏性体也 『大乘玄論』卷第三，「但河西道朗法師与曇無讖法師，共翻涅槃經，親承三藏，作涅槃義疏，釈仏性義。正以中道為仏性。」(T45, no. 1853, p. 35, c19-21)を参照。
- 62 讖 底本の「遠」を改める。前注 60 を参照。
- 63 『大乘玄論』卷第三，「第九師以得仏之理為正因仏性也。」(T45, no. 1853, p. 35, c15-16), 『涅槃經遊意』，「次有新安瑤師云，衆生有成仏之道理，此理是常，故説此衆生為正因仏性。此理附於衆生，故説為本有也。」(T38, no. 1768, p. 237, c9-11)を参照。
- 64 法瑤 湯用彤『漢魏西晋南北朝仏教史』(前掲同書) p. 484によって改める。
- 65 法師亦有同此説 底本の「非法師亦有同此説」を文意によって改める。
- 66 転側 方向を変えるの意。
- 67 靈根令正 靈根寺慧令僧正(生没年未詳)を指す。
- 68 師子吼品云……名為仏性 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「以是義故，十二因縁名為仏性。仏性者，即第一義空。第一義空名為中道。中道者，即名為仏。仏者，名為涅槃。」(T12, no. 375, p. 768, c17-20)を参照。
- 69 師子吼菩薩問言……諸衆生悉未具足 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「爾時師子吼菩薩摩訶薩白仏言，世尊。若仏与仏性無差別者，一切衆生何用修道。仏言，善男子。如汝所問是義不然。仏与仏性雖無差別，然諸衆生悉未具足。」(T12, no.



- 375, p. 768, c21-24) を参照。
- 70 此れは性なり。[崔] の注によれば衍文。
- 71 愛公 白馬寺愛法師を指す。
- 72 常住 底本の「女常住」を文意によって改める。
- 73 靈味小亮法師 靈味寺宝亮（444-509）を指す。
- 74 梁武蕭天子 梁武帝（502-549 在位）を指す。
- 75 大経如来性品初云……即是我義 『南本涅槃經』 卷第八，如来性品，「我者，即是如来藏義。一切衆生悉有仏性，即是我義。」（T12, no. 375, p. 648, b7-8）を参照。
- 76 中寺小安法師 生没年は 454-498。『高僧伝』 卷第八に本伝がある。T50, no. 2059, p. 380, a10-29 を参照。
- 77 眞伝 底本の「眞転」を [崔] によって改める。
- 78 朽 底本の「吸」を文意によって改める。
- 79 無性 底本の「一其日」を [崔] によって改める。
- 80 光宅雲法師 光宅寺法雲（467-529）を指す。
- 81 解背或之性 底本の「解皆或之性」を [崔] によって改める。
- 82 夫人経云……不求涅槃 『勝鬘經』 自性清浄章，「若無如来藏者，不得厭苦樂求涅槃。」（T12, no. 353, p. 222, b14-15）を参照。
- 83 背 底本の「皆」を底本の頭注によって改める。
- 84 実 底本の「宝」を [崔] によって改める。
- 85 之也 末尾の助辞であり，たんに「也」とあるのと同義。
- 86 河西道朗法師 生没年未詳。吉蔵の文献に言及が多い。曇無讖の『涅槃經』の翻訳に参加し，「大涅槃經序」（『出三蔵記集』 卷第八所収）を著わす。『法華統略』を著わしたとされるが，現存しない。
- 87 莊嚴旻法師 莊嚴寺僧旻（467-527）を指す。
- 88 招提白琰公 招提寺慧琰を指す。布施浩岳『涅槃宗の研究』後篇（初版 1942。国書刊行会，1973）pp. 227-228 を参照。
- 89 大経師子吼品云……正因者謂諸衆生也 『南本涅槃經』 卷第二十六，師子吼菩薩品，「正因者，謂諸衆生。」（T12, no. 375, p. 775, b28）を参照。
- 90 定林柔法師 定林寺僧柔（431-494）を指す。
- 91 開善智蔵師 底本の「開善知蔵師」を文意により改める。開善寺智蔵（458-522）を指す。
- 92 大経迦葉品云不即六法不離六法 『南本涅槃經』 卷第三十，師子吼菩薩品，「説仏性者，亦復如是。非即六法，不離六法。」（T12, no. 375, p. 802, c1-2）を参照。
- 93 大経師子吼品云凡有心者皆得三菩提 前注 15 を参照。
- 94 尽 底本の「罪」を「尽（盡）」に改める。『中観論疏』 卷第九，「又謂，心不可朽滅是常見。草木一化便尽，則是断見。」（T42, no. 1824, p. 138, b19-20）を参照。また，『勝鬘經疏義私鈔』 卷第六，「今明一切衆生皆有眞實之性。若無此性，則一化便尽。与艸

- 木不殊。由有此性，故相統不斷，終得大明，故云生死依如来藏。」(『大日本統藏經』1:30, p. 365, c6-8) を参照。
- 95 迦葉品亦云……簡草木等 『南本涅槃經』卷第三十三，迦葉菩薩品，「非佻性者，所謂一切牆壁瓦石無情之物。」(T12, no. 375, p. 828, b27-28) を参照。
- 96 彼云自性住佻性引出佻性得果佻性也 前注 31 を参照。
- 97 曇無讖 底本の「曇無遠」を改める。前注 60 を参照。
- 98 依經卜度 「不依經度」の誤写として翻訳する。
- 99 如大經云競捉瓦礫謬伝羊角刀 底本の「投」を「捉」に改める。『南本涅槃經』卷第八，如来性品，「王復問言。卿所見刀相貌何類。答言。大王。臣所見者，如殺羊角。」(T12, no. 375, p. 653, b12-13) を参照。
- 100 如師子吼中啾啾 出典未詳。
- 101 屬賓 底本は意味不明の漢字であるが，文脈により改める。
- 102 論 底本の「訖」を改める。
- 103 十二門論云今当略解摩訶衍 『十二門論』，「説曰。今当略解摩訶衍義。問曰。解摩訶衍者，有何義利。答曰。摩訶衍者，是十方三世諸仏甚深法藏。為大功德利根者説。末世衆生薄福鈍根。雖尋經文，不能通達。我愍此等欲令開悟。又欲光闡如来無上大法。是故略解摩訶衍義。」(T30, no. 1568, p. 159, c6-11) を参照。
- 104 中論初亦云如摩訶般若波羅蜜中説 『中論』卷第一，觀因緣品，「問曰。何故造此論。答曰。有人言万物從大自在天生。有言從韋紐天生。有言從和合生。有言從時生。有言從世性生。有言從變生。有言從自然生。有言從微塵生。有如是等謬，故墮於無因邪因斷常等邪見，種種説我我所，不知正法。仏欲斷如是等諸邪見令知仏法故，先於声聞法中説十二因緣。又為已習行有大心堪受深法者。以大乘法説因緣相。所謂一切法不生不滅不一不異等。畢竟空無所有。如般若波羅蜜中説。」(T30, no. 1564, p. 1, b18-28) を参照。
- 105 汝論初命章云……三藏中實義 『成実論』卷第一，具足品，「広習諸異論 遍知智者意 欲造斯実論 唯一切智知 諸比丘異論 種種仏皆聽 故我欲正論 三藏中實義」(T32, no. 1646, p. 239, a28-b2) を参照。
- 106 懸絶 底本の「豈懸絶」を改める。
- 107 法華經安樂行品云莫親近三藏学者 『法華經』安樂行品，「亦不親近 増上慢人 貪著小乘 三藏学者 破戒比丘 名字羅漢 及比丘尼 好戲笑者 深著五欲 求現滅度 諸優婆夷 皆勿親近」(T09, no. 262, p. 37, b23-26) を参照。
- 108 遍 底本の「辺」を改める。
- 109 大品遍学品云十地为戲論乃至一切戲論 『大品般若經』卷第二十二，遍学品，「仏告須菩提，菩薩摩訶薩觀色若常，若無常，是為戲論。觀受想行識若常，若無常，是為戲論。觀色若苦，若樂，受想行識若苦，若樂，是為戲論。觀色若我，若非我，受想行識若我，若非我。色若寂滅，若不寂滅，受想行識若寂滅，若不寂滅，是為戲論。苦聖諦応見，集聖諦応断，滅聖諦応証，道聖諦応修，是為戲論。応修四禪，四無量心，

四無色定，是為戲論。応修四念処，四正勤，四如意足，五根，五力，七覚分，八聖道分，是為戲論。応修空解脱門，無相解脱門，無作解脱門，是為戲論。応修八背捨，九次第定，是為戲論。我当過須陀洹果，斯陀含果，阿那含果，阿羅漢果，辟支仏道，是為戲論。我当具足菩薩十地，是為戲論。我当入菩薩位，是為戲論。我当淨仏国土，是為戲論。我当成就衆生，是為戲論。我当生仏十力，四無所畏，四無礙智，十八不共法，是為戲論。我当得一切種智，是為戲論。我当断一切煩惱習，是為戲論。須菩提。是菩薩摩訶薩行般若波羅蜜時，色若常，若無常，不可戲論故不戲論。受想行識若常，若無常，不可戲論故不戲論。乃至一切種智，不可戲論故不戲論。何以故，性不戲論性，無性不戲論無性。離性，無性，更無法可得所謂戲論者，戲論法，戲論処。以是故，須菩提。色無戲論，受想行識乃至一切種智無戲論。如是。須菩提。菩薩摩訶薩行無戲論般若波羅蜜。」(T08, no. 223, p. 380, c16-p. 381, a14) を参照。

- 110 経言諸有二者有所得 『大品般若経』 卷第二十一，三慧品，「諸有二者，是有所得。無有二者，是無所得。」(T08, no. 223, p. 373, c26-27) を参照。
- 111 外道義 サーンキヤ哲学を指す。冥は，サーンキヤ学派において，世界を作る根本原質である冥初 (prakṛti) を指す。冥初は冥性，冥諦ともいい，また世性，自性ともいう。覚は，この冥初から展開する根源的な思惟機能，buddhi をいう。
- 112 覚 底本の「学」を改める。
- 113 如大経云亦名甘露亦名毒藥也 『南本涅槃経』 卷第十，一切大衆所問品，「当知是膏亦名甘露，亦名毒藥。」(T12, no. 375, p. 667, c13-14) を参照。
- 114 両 底本の「西」を改める。
- 115 関 底本の「開」を改める。
- 116 大経下文云……非断非不断 『南本涅槃経』 卷第十九，光明遍照高貴徳王菩薩品，「一切諸仏無有畢竟入涅槃者，常住無変。如来涅槃非有非無，非有為非無為，非有漏非無漏，非色非不色，非名非不名，非相非不相，非有非不有，非物非不物，非因非果，非待非不待，非明非闇，非出非不出，非常非不常，非断非不断，非始非終，非過去非未來非現在，非陰非不陰，非入非不入，非界非不界，非十二因縁非不十二因縁。」(T12, no. 375, p. 730, a18-26) を参照。
- 117 仏性非非所不非是所不是 類似的表現として，『大品経義疏』 卷第八，「問。独空但無空無不更有所無耶。答。独空品空絶待義，一切皆絶，百非不能非，百是不能是，能(→是)是所不能(能は衍字?)是，非是亦不是，非非所不非，百非亦不非。不知何以因之，強名其空。故名独空無一切伴，故名独也。」(『大日本統蔵経』 1:38, p. 113, b10-14)，『大品経義疏』 卷第十，「百非不能非，百是不能是，能(→是)是所不是，非是亦不是，非非所不非，是非亦不非。何者以正法為身，故名法身。正法性遠離一切言語道，一切起不起，未皆寂滅性。」(『大日本統蔵経』 1:38, p. 156, c12-15) を参照。
- 118 是故仏性非非所不非是所不是是非亦不非非是亦不是百非所不非百是所不是 『二諦義』 卷第三，「何者，俗諦絶則絶実。真諦絶則絶仮。俗諦絶実者，是是則是实是。非非則是性非。以俗諦絶実故，是是不能是。百是所不是。非非不能非。百非所不非也。

- 真諦絶仮者，非是是仮是。是非是仮非。真諦絶仮故，非但是不能是，非是亦不是。非但非非不能非，是非亦不非。是是与非是，一切不能是。非非与是非，一切不能非。真諦双絶，世諦仮実，此即漸捨。」(T45, no. 1854, p. 112, a28-b7) を参照。
- 119 万非 底本の「万不非」を改める。
- 120 如大経下文明煩惱は仏性色亦是仏性 『南本涅槃経』卷第三十，師子吼菩薩品，「如来色者常不断故。是故説色名為仏性。」(T12, no. 375, p. 802, a26-27)，同，卷第三十二，迦葉菩薩品，「一切無明煩惱等結悉是仏性。」(T12, no. 375, p. 818, b27-28) を参照。
- 121 如釈空空云……名為空空 『南本涅槃経』卷第十五，梵行品，「善男子。是有是无，是名空空。是是非是，是名空空。」(T12, no. 375, p. 704, a24-25) を参照。
- 122 是故是是非是是皆是空空是是非是是而是是非非非非非而非不非也 意味不明。更に検討を要する。
- 123 有 底本の「者」を[崔]によって改める。
- 124 無 底本の「無無」を改める。
- 125 色性是空 底本の傍注に「無明初念衆生」とある。
- 126 儻 粗劣の意。
- 127 神我 サーンキヤ学派の純粹精神 (puruṣa) のこと。
- 128 遍 底本の「辺」を[崔]によって改める。
- 129 二十四法 サーンキヤ学派の二十五諦のうち，神我を除いた二十四諦を指す。
- 130 朽 底本の「吸」を文意によって改める。
- 131 招 底本の「照」を[崔]によって改める。
- 132 関 底本の「開」を[崔]によって改める。
- 133 気 底本の「無一」を[崔]によって改める。
- 134 如波若経説若有我相衆生相即非菩薩 『金剛般若経』，「若菩薩有我相，人相，衆生相，寿者相，即非菩薩。」(T08, no. 235, p. 749, a10-11) を参照。
- 135 如金光明経云……無明故有 『合部金光明経』卷第四，空品，「善女当觀 諸法如是 何処有人 及以衆生 本性空寂 無明故有」(T16, no. 664, p. 379, c11-13) を参照。
- 136 以無明見衆生 底本の「以無明所謂見衆生」を改める。「所謂」は未詳。衍字か。
- 137 能成大覺 底本の「非成大覺」を[崔]によって改める。
- 138 三聚等 攝律儀戒，攝善法戒，饒益有情戒。
- 139 助 底本の「即」を[崔]によって改める。
- 140 文云衆生仏性住五陰中若害五陰名為殺生 『南本涅槃経』卷第八，如来性品，「衆生仏性住五陰中。若壞五陰，名曰殺生。」(T12, no. 375, p. 649, c8-9) を参照。
- 141 文云仏性非陰非衆生 類似の文として，『南本涅槃経』卷第三十，師子吼菩薩品，「説仏性者亦復如是。非即六法，不離六法。善男子。是故我說衆生仏性非色不離色，乃至非我不離我。」(T12, no. 375, p. 802, c1-4) を参照。
- 142 関 底本の「開」を[崔]によって改める。

- 143 如涅槃論云衆生是仏性 前注 35 を参照。
- 144 仮 底本の「偽」を「崔」によって改める。
- 145 中論十二門論云有為空故無為亦空也 『十二門論』, 「有為空故, 無為亦空。」(T30, no. 1568, p. 162, a28-29) を参照。
- 146 檢責 底本の「檢責」を「崔」によって改める。「檢責」は, 検査の意。
- 147 大経師子吼第二云……並非仏性 一致しないが, 『南本涅槃經』卷第三十一, 迦葉菩薩品, 「衆生説色。乃至説識是仏性者亦復如是。雖非仏性, 非不仏性。」(T12, no. 375, p. 815, c17-19) を参照。
- 148 又云心非仏性何以故心は無常仏性常恒無變故 『南本涅槃經』卷第二十六, 師子吼菩薩品, 「心非仏性。何以故, 心は無常, 仏性常故。」(T12, no. 375, p. 778, a8-9) を参照。
- 149 華嚴經云仏性者非心識所識亦非境界也 出典未詳。
- 150 金剛波若經云仏説諸心皆為非心 『金剛般若經』, 「如來說諸心, 皆為非心, 是名為心。」(T08, no. 235, p. 751, b26) を参照。
- 151 經云不即六法六法既非仏性不離六法何得用六法是仏性 『南本涅槃經』卷第三十, 師子吼菩薩品, 「説仏性者, 亦復如是。非即六法, 不離六法。」(T12, no. 375, p. 802, c1-2) を参照。
- 152 「可明仏性体相」 底本は「可得可明仏性体相」に作る。「可得」は不明。
- 153 及 底本の「反」を「崔」によって改める。
- 154 經云当觀諸法……無明故有也 前注 135 を参照。
- 155 大品經三慧品云……而欲得菩提 『大品般若經』卷第二十一, 三慧品, 「若仏以五眼觀, 不見衆生生死中可度者。」(T08, no. 223, p. 374, b21-22) を参照。
- 156 目 底本の「困」を「崔」によって改める。
- 157 目 底本の「困」を「崔」によって改める。
- 158 今時此間宝喜淵師祇洹雲公 崔氏は, 韓国の僧と解釈する。
- 159 城 底本の「域」を「崔」によって改める。
- 160 治城素法師 『弘贊法華伝』卷第六, 「釈正則。不知何許人也。宿植芳因, 早敦信悟。落采之後, 即誦法華。嘗与治城寺素法師, 一夏同住。素, 于時為人講法華經。」(T51, no. 2067, p. 30, b21-23) を参照。
- 161 氣 底本の「無一」を「崔」によって改める。
- 162 不足及破限 意味不明。
- 163 耽羅刀牛利等人 「耽羅」については, 崔鋁植「『大乘四論玄義記』と韓国古代仏教思想の再検討」(前掲論文) pp. 77-78 に考察がある。現在の済州島を刺す。「刀牛利等人」については, 意味不明としている。「刀牛」は写本の判読が難しいので, 文字も確定的ではない。
- 164 經云正法正道本不二也 出典未詳。
- 165 大品經三慧品云……無所得也 前注 110 を参照。

(70)

- 166 遍 底本の「辺」を改める。
- 167 大品經廿二卷遍學品云……斷煩惱及習也 『大品般若經』卷第二十二，遍學品，「當知二相者，無有檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜，無有道，無有果乃至無有順忍，何況見色相乃至見一切種智相。若無修道，云何得須陀洹果乃至阿羅漢果，辟支佛道，阿耨多羅三藐三菩提及斷一切煩惱習。」(T08, no. 223, p. 383, b28-c4) を参照。
- 168 大品經第十一卷照明品云……遠離般若波羅蜜 『大品般若經』卷第十一，照明品，「若菩薩摩訶薩作是念，是般若波羅蜜無所有，空虛(聖語藏本には「虚空」に作る)不堅固。是菩薩摩訶薩則捨般若波羅蜜，遠離般若波羅蜜。須菩提。以是因緣故，捨離般若波羅蜜。」(T08, no. 223, p. 303, a25-28) を参照。
- 169 如中論云若有所受即墮斷常也 『中論』卷第三，觀成壞品，「若有所受法 即墮於斷常 當知所受法 為常為無常」(T30, no. 1564, p. 28, c22-23) を参照。
- 170 大經第十五梵行品云……是故名為無所得也 『南本涅槃經』卷第十五，梵行品，「無所得者，名為大乘。菩薩摩訶薩不住諸法，故得大乘。是故菩薩名無所得。有所得者，名為聲聞辟支佛道。菩薩永斷二乘道，故得於佛道。是故菩薩名無所得。」(T12, no. 375, p. 706, c16-20) を参照。
- 171 義家云有所得者無道無果無所得者有道有果 『大乘玄論』卷第二にも，「又大經云，有所得者，無道無果，無所得者，有道有果也。」(T45, no. 1853, p. 30, a17-18) とある。『涅槃經』には見つかからない。『大智度論』卷第八十七，「是故經說，著有者難得解脫。有所得者，無道無果，無阿耨多羅三藐三菩提。須菩提問，世尊。若有所得者，無道無果，無阿耨多羅三藐三菩提。無所得者，有道有果不。仏答，無所有即是道，即是果，即是阿耨多羅三藐三菩提。」(T25, no. 1509, p. 674, a24-29) を参照。また，『法華義疏』卷第四には，「大品云，有所得者，無道無果。」(T34, no. 1721, p. 507, c14-15) とある。この中の引用文については，『大品般若經』卷第二十六，平等品，「是人得是法，是為大有所得。用二法。無道無果。須菩提白仏言，世尊。若行二法，無道無果。行不二法，有道有果不。仏言，行二法，無道無果。行不二法，亦無道無果。若無二法，無不二法，即是道，即是果。」(T08, no. 223, p. 414, b22-27) を参照。
- 172 有無所故 意味不明。「有所得故」の誤りかもしれない。
- 173 大品經第十二卷嘆淨品云……即是性 『大品般若經』卷第十二，歎淨品，「是一法性是亦無性，是無性即是性，是性不起不滅。如是。須菩提。菩薩摩訶薩若知諸法一性，所謂無性無起無作，則遠離一切礙相。」(T08, no. 223, p. 308, b3-7) を参照。
- 174 大經第二卷末……正譬中道 『南本涅槃經』卷第二，哀歎品，「譬如春時有諸人等，在大池浴乘船遊戲，失琉璃寶沒深水中。是時諸人悉共入水，求覓是寶，競捉瓦石草木砂礫，各各自謂得琉璃珠，歡喜持出，乃知非真。是時寶珠猶在水中。以珠力故，水皆澄清。於是大衆乃見寶珠放在水下，猶如仰觀虛空月形。」(T12, no. 375, p. 617, c3-9) を参照。
- 175 実 底本の「性実」を「崔」によって改める。
- 176 意尚未足 底本の「意尚未足是」を改める。「是」は衍字か。

- 177 如經云……無二之性即実性 『南本涅槃經』卷第八，如來性品，「凡夫之人聞已，分別生二法想。明与無明，智者了達其性無二。無二之性，即是実性。……若言一切法無我如來秘藏亦無有我，凡夫謂二，智者了達其性無二。無二之性，即是実性。」(T12, no. 375, p. 651, c2-14) を参照。
- 178 迦葉品文……我先不說中道為仏性耶 『南本涅槃經』卷第三十二，迦葉菩薩品，「仏言，善男子。何因緣故如是失意。我先不說衆生仏性は中道耶。」(T12, no. 375, p. 818, c24-26) を参照。
- 179 云何為仏性仏答仏性者即是第一義空 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「汝問。云何為仏性者，諦聽諦聽。吾當為汝分別解說。善男子。仏性者，名第一義空。」(T12, no. 375, p. 767, c17-19) を参照。
- 180 云何言空者……行中道故見於仏性 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「善男子。仏性者，名第一義空。第一義空名為智慧。所言空者，不見空与不空。智者見空及与不空，常与無常，苦之与落，我与無我。空者，一切生死。不空者，謂大涅槃。乃至無我者，即是生死。我者，謂大涅槃。見一切空，不見不空，不名中道。乃至見一切無我，不見我者，不名中道。中道者，名為仏性。以是義故，仏性常恒無有變易。無明覆故，令諸衆生不能得見。声聞緣覺見一切空，不見不空，乃至見一切無我，不見於我。以是義故，不得第一義空。不得第一義空，故不行中道。無中道故，不見仏性。」(T12, no. 375, p. 767, c18-p.768, a1) を参照。
- 181 下文結言第一義空即是仏性仏性即是中道 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「十二因緣名為仏性。仏性者，即第一義空。第一義空名為中道。中道者，即名為仏。仏者，名為涅槃。」(T12, no. 375, p. 768, c17-20) を参照。
- 182 仏答第一問言……中道種子 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「仏性者，即是一切諸佛阿耨多羅三藐三菩提中道種子。」(T12, no. 375, p. 768, a8-9) を参照。
- 183 下文結言如是中道名為仏性 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「中道者，名為仏性。」(T12, no. 375, p. 767, c24-25) を参照。
- 184 下文云仏性者非内非外 『南本涅槃經』卷第二十六，師子吼菩薩品，「仏性者，非内非外。」(T12, no. 375, p. 775, a23-24) を参照。
- 185 又云非因非果名為仏性非因非果故常恒無反 『南本涅槃經』卷第二十五，師子吼菩薩品，「十二因緣出不不滅，不常不斷，非一非二，不來不去，非因非果。善男子。是因非果。如仏性は果非因。如大涅槃是因是果。如十二因緣所生之法非因非果。名為仏性。非因果故常恒無變。」(T12, no. 375, p. 768, b20-24) を参照。
- 186 耶「邪」に通じる。
- 187 如涅槃論衆生是仏也 前注 35 を参照。
- 188 經云凡有心者皆当成仏 前注 15 を参照。
- 189 同 底本の「同同」を改める。「同」一字は衍字か。
- 190 無所覺体亦無無「無無」の「無」一字は衍字か。この文は意味不明。
- 191 有 底本の「有有」を「崔」によって改める。

192 斥破 底本の「片破」を[崔]によって改める。

193 柱 底本の「拄」を[崔]によって改める。

194 菩薩頭陀經云照明菩薩……虚空即是仏性 『仏為心王菩薩説頭陀經』,「照明菩薩言, 觀煩惱性, 内度衆生, 其相可解。外法云何。心王菩薩言, 如是。如是。如汝所問, 内外不異。雖復不異, 要先觀内。一煩惱淨, 衆多法淨。(一心清淨, 八万四千煩惱悉皆清淨。經曰, 心淨則仏土淨也。)何以故爾。内是外根源, (内心是外根。無明株机既断, 六師自然消滅也。)衆聖之源。(前仏後仏, 皆同此悟。故云, 衆聖之源也。)得斯要法, 法度眾生。(煩惱是衆生, 清淨是法。故言法度衆生也。)衆生無尽, 仏身無尽。衆生無辺, 仏身無辺。衆生之性即虚空性, 虚空之性即衆生性。由有衆生, 即有仏性生。若無衆生, 仏亦不生。(離衆生無仏, 離仏無衆生。転妄入真, 即是仏生。有仏, 有衆生, 声聞見。無仏, 無衆生, 菩薩見也。)」(『歳外仏教文献』第一輯 [宗教文化出版社, 1995], p. 283, a8-p. 284, a6) を参照。

195 此彼非彼 底本の「此讎非讎」を底本の頭注によって改める。